

女子短大生における性役割社会化と職業興味*

若林 満 後藤 宗理¹⁾ 鹿内 啓子²⁾

I. 研究の目的

1. 問題と目的

筆者らは女子短大生を対象に、職業意識・職業選択と自己概念との関係を追究してきた(若林, 鹿内, 後藤, 1981, 1982; 若林, 後藤, 鹿内, 1983, 1984; 鹿内, 後藤, 若林, 1982)。今までの研究を通じ、①自己概念(特にM-F特性)と職業意識・職業選択の間には一貫した関係があること。②この関係は女子短大生の専攻(特に看護・保育などの専門系か人文などの非専門系か)によって、異なった様相をみせること。③1年次と就職戦線の真ただ中(2年次の12~1月頃)での意識の変化とを比べると、職業意識は個人の中で非常に大きく変化してしまうが、しかし自己概念は安定的であること。④自己概念と職業意識は2つのモチーフによって個人の中で統合されていること。すなわち、1つは力強さ・有能性の自己概念と職業生活における職務挑戦志向性が結合した「達成のモチーフ」であり、他の1つは親しみやすさ・協調性と職業での人間関係志向性の結合した「親和のモチーフ」である。これらのモチーフは、1年次と2年次、就職未決定時と決定後では、その顕在性が変化する。⑤自己概念と職業意識の関係は女子短大生の専門ごとに(保育・看護系の専門職と人文系の非専門職で)異なったものとなる。

以上のような研究成果をふまえ、前回の研究(若林, 後藤, 鹿内, 1985; 後藤1985)では、現在の職業選択に先行する過程での各種要因の効果が検討された。この研究の結果は、次の5点に要約されるであろう。①女子短大生の職業意識や自己概念の発達を規定する要因として、

* 本研究のデータ処理は、名古屋大学大型計算機センターのFACOM M-382によって行われた。

本論は、I章若林、II・IV章後藤、III章鹿内、V章若林・後藤によって分担執筆された。

1) 名古屋市立保育短期大学助教授

2) 元名古屋大学教育学部助手

大別して家庭の社会経済的地位(「上位-下位」次元)と、性役割しつけを通じ両親との同一視を達成する程度(「同一視-非同一視」次元)の2つが存在することが示唆された。②両次元を組み合わせ、背景要因のクラスター(筆者らが社会化クラスターと名づけたもの)を構成してみると、人文系では上位-同一視型が多く、保育系では下位-非同一視型が多くみられた。③自己概念の力強さや職業レディネス、職務挑戦志向性などでは下位-同一視型がもっとも高い平均値を示し、このタイプでの職業への積極的な態度が明らかにされた。④また、上位-同一視型は職業に対する“こしかけ”的態度として特徴づけられた。⑤追跡調査の結果、自己概念・職業意識に関するほとんどの尺度において、1年次から2年次にかけての平均値の有意な上昇が見出された。

上記③で「下位-同一視」クラスターが高い自己概念・職業意識を示した理由として、①このクラスターは両親の学歴は低く、②家庭の社会経済的地位は「中の下」以下であるが、③社会化の面では「女の子」としてしつけられ、両親の生き方を参考にするという点で両親との同一視を形成していることが明らかにされた。また、④母親が職業をもっている割合も高く、いふならば庶民的伝統に基づく性役割社会化、ないし堅実な農村的・下町的性役割社会化のタイプであることが示唆された。また、上記④の上位-同一視型は、この対極にあることも示された。

以上のような現在までの研究成果をふまえ、今回は①性役割社会化に関する諸尺度を開発し、それらと職業意識との関係を明らかにすること、②職業意識の測度として今までの研究で問題とすることができなかった職業興味尺度を導入すること、③女子短大生のサンプルを拡大し、様々な異なるタイプの専攻(職業分野)がカバーできるようにすることの3点を主要な調査の目的とした。

2. 研究の焦点

1) 社会化経験と職業意識

両親のしつけが女子の性役割行動や性役割観ひいては

職業意識に影響を与えるという研究は、すでにいくつかなされている。まず柏木ら(1973, 1975)は、両親の子供の性役割社会化に与える影響を、行動的レベル(性度につながる行動特性)と認知的レベル(性役割観)の2側面からとらえ、この2側面での両親の反応(実際に両親から回答を得た)が、子どもの性役割行動・性役割観にどのような影響を与えているかを、小4, 小6, 中2の生徒を対象に調査した。その結果、各回答者(両親, 子ども)それぞれの内部では、明確な一貫した関係が見出されたが、両親の性役割しつけと性役割観が、子どもの性役割行動と性役割観を規定するという一貫した関係は発見できなかった。基本的に同様な方法で、伊藤(1980)は、父母の養育態度(の父母の回答に基づく)と、娘(大学生)の職業経歴選択との関係を研究した。分析の結果、娘が父母から「女の子」としてしつけられたという認知をもつ場合、また娘が高所得者の家庭の出身の場合、専業主婦型のキャリアが選択され、上記の傾向が弱まると専業主婦型のキャリアの選択が行われることを明らかにした。一方、小川ら(小川・田中, 1979, 1980; 田中・小川, 1981)は親の期待や親との同一視が、娘の職業希望とどのような関係をもつかを、看護婦, 教師, その他多様な職業について分析を行った。その結果、親の職業と娘の職業希望には密接な関係があり、特に両親が娘に職業継承を期待したり、娘が両親を同一視する場合、その傾向が強いことを明らかにした。

しかし以上の研究では、柏木らの「性差別的しつけ尺度」を除いて、性役割社会化の詳しい実態を把握しようとする試みは稀薄である。本研究では柏木らの尺度を参考に、子どもの頃の性役割社会化経験をより明確にとらえるための尺度の開発が試みられる。

子どもの頃のしつけ経験が、その後の職業発達に影響を与えることは否定しがたいが、しかしより直接的なインパクトは青年期(特に青年中期)での、学校生活を中心とした経験であろう(後藤, 1985; 若林, 富安, 湯川, 1983; 愛知県婦人労働サービスセンター, 1983; Owens and Schoenfeldt, 1979; Eberhardt and Muchinsky, 1982)。例えば Eberhardt と Muchinsky は、Owens らにならって118アイテムからなる Biographical Questionnaire (BQ質問紙)を作成し、大学生男女を対象に調査を行なった。BQ質問紙の項目はすべて青年中期(Highschoolを中心とした)の学校・家庭での経験を記述するもので、被調査者は回想法に基づいて経験の程度を評定した。

Eberhardt と Muchinsky は、816名の男女大学生を対象に、BQ質問紙調査を実施し、データを男女別々に因子分析(主因子法)した。その結果、男女で異なる因子

構造が析出された。まず女子では、①社会的リーダーシップと異性に対する人気, ②学業成績, ③両親の統制からの自由, ④社会経済的地位, ⑤運動競技参加, ⑥宗教的活動, ⑦社会的適応不良, ⑧母親との親和関係, ⑨親族との対立, ⑩父親との親和関係, ⑪学校・文化活動, ⑫科学的興味, ⑬独立・支配, ⑭勉強に対する積極的態度, ⑮家族内での地位, という15の因子が見出された。次に男子では、①運動競技参加, ②学業成績, ③両親の統制対自由, ④社会経済的地位, ⑤社会的外向と人気, ⑥宗教的活動, ⑦社会的適応不良, ⑧科学的興味, ⑨両親との親和関係, ⑩課外活動, ⑪独立・支配, ⑫親族との対立, ⑬勉強への関心の13因子が検出された。男女の間では、青年中期の共通した社会化経験もあるが、それぞれに特有な次元(例えば女子の「異性に対する人気」対男子の「社会的外向」など)も見出されている。

次に Eberhardt らは、男女それぞれの因子尺度を用い、それらが大学生各人の現在の職業興味をどの程度説明する力があるかを明らかにしようとした。職業興味の尺度としては、Holland (1973) のVPI (Vocational Preference Inventory) が用いられた。この測定では職業興味は、①具体的職業名に対する関心, ②いろいろな作業や活動に対する興味, また③いろいろな作業や活動に対する自己能力評価として把握されている。そして、これら3つの次元での各個人の反応は次の6つの職業領域に対する興味得点として集計される。すなわち、①現実的 (Realistic), ②探究的 (Investigative), ③芸術的 (Artistic), ④社会的 (Social), ⑤企業的 (Enterprising), ⑥慣習的 (Conventional)の6つである。さて、次にEberhardtらが行った分析は、先のBQ尺度を独立変数とし、重回帰分析に基づきそれらの線型一次結合から、Hollandの6つの職業興味を説明することであった。その結果BQ尺度の説明力(R^2)は男子では.116から.249, 女子では.100から.403と有意な値を示した。すなわちBQ尺度によって測られたHighschool時代の経験が、大学生の現在の職業興味を有意な形で説明したのである。特に、男女とも探究的な職業興味において最も高い R^2 の値が検出された(男子で.249, 女子で.403)。

次に, Eccles と Hoffman (1984) は性役割の社会化と職業行動との関係を問題としている研究のレビューを行なっているが、その中で社会化過程を規定する主要な要因として次の6つをあげている。①両親との同一視とモデリング (Freud 的な同一視とモデリングによる性役割学習), ②両親の賞罰行動のパターン (性適合的な行動を強化し不適合行動を消去する程度), ③直接的教授 (性によって行動規範が異なることを直接教える),

④遊び（男の子らしい遊びと女の子らしい遊び）、⑤両親の認知と相互行為が子供の自己概念（男の子、女の子という意識）の形成に与える影響、⑥両親の期待（子供の性によって異なる期待の内容）。以上は、家庭の中の性役割に関する社会化の要因であるが、Eccles と Hoffman は学校やマスメディア、先生、教科書、スポーツ活動、仲間集団などの性役割社会化に対する機能についても論じている。結論として彼女らは、これらの要因はアメリカ社会における男女の職業行動の違いを規定する基本的なファクターとなっているが、急激な社会環境の変化は、職業における性差をより曖昧なものにしていると指摘している。

以上のまとめとして、女子における職業意識の形成を規定する要因として少なくとも①両親の職業や家庭の社会経済的地位、②両親との同一視、③両親の期待、④性役割しつけの経験、⑤学校生活を中心とした青年中期（中学・高校時代）での生活経験が高い重要性をもつことが理解できよう。本研究においては、質問紙により上記5つの側面に関し体系的なデータの収集が試みられることになる。

2) 職業興味尺度

先に紹介した通り、職業興味尺度としては、現在、Holland (1973) のVPIが、最も高い信頼性と妥当性を有しているものと思われる。しかし、①この尺度はアメリカで開発されたものであり、職業名や職業構造が異なる日本では適用しにくいこと、また②職業興味の領域が男子中心であるため、女子の場合興味をそそるような職業名や職業活動が少なく、キメの細かい女子の職業興味の測定が困難であることが指摘されねばならない。例えば先のEberhardtらの研究においても、男子の場合、現実的、探究的、芸術的、社会的、企業的、慣習的という6つの職業興味類型はかなり一般的に存在し、全被調査者は各類型にそれぞれ17%、21%、15%、13%、24%、10%と1割から2割強の範囲でかなり均等に分布していることが示された。しかし女子の場合、その割合は各類型に対しそれぞれ、0.8%、13%、24%、44%、12%、6%と大きなバラツキを示した。すなわち、Hollandの職業興味尺度では、女子の場合は芸術的と社会的の2つ

の型に分類が集中する（上記の例では68%がこの2類型にはいってしまう）ことになり、大雑把な分類しかできなくなってしまうのである。

上に示した2つの Holland の職業興味尺度の問題点を克服するためには、新たに女子を対象とした職業興味尺度を構成する他はない。しかしそのような尺度は現時点では適当なものが見出されないので、本研究においては予備的研究の意味も含めて、女性用職業興味尺度の作成が試みられることになる。そして、性役割社会化および青年中期の生活経験によって、様々な職業類型に対する女性の職業興味が、どの程度説明可能となるかが検討されることになる。

3) 職業選択と学校選択

短大生の多くは、学校を選択した時点で同時に職業をも選択している。看護、保育、栄養といった専門職を育成する短大の場合がこれである。また、各種専門学校や専修学校の場合も、ほぼ学校選択=職業選択の形をとる。これに対し人文系（英文、国文、人間関係、家政など）の場合、学校選択はその後の多様な職業選択のための一ステップという意味合いが強くなっていく。また、専門系と人文系の中間に属する商業・秘書のような系列も存在している。このことは、短大生の職業興味の研究に当たっては、できるだけ多様な短大を調査対象として選択し、女性の職業興味の中をできるだけ広く確保する必要があることを意味している。そして最終的には4大生女子や女子高校生をも対象とした、女子の職業興味の体系的な研究がなされなければならないであろう。

II. 方 法

1. 被調査者と調査の実施状況

専門性の異なる被調査者集団を得るために、表1に示したとおり、専修学校、栄養・家政系、保育系、商業系、看護系の5つの領域から11の短大・専門学校が選ばれ、合計680名の被調査者が質問紙調査の対象とされた。専修学校系は、東京都内のビジネススクールである。栄養・家政系の2短大はいずれも名古屋市内にあり、両者は他の諸学科の中に栄養・家政系学科を含む構成となっていた。保育系の2短大は愛知県下にあり、A短大は保育科、

表1 専門別にみた被調査者の内訳

専修学校系	栄養・家政系短大		保育系短大		商業系短大		看護系短大・専門学校				合計
A私立	A私立	B市立	A市立	B私立	A市立	B私立	A県立	B市立	C国立	D私立	
72	49	63	65	124	69	58	40	53	49	38	
小計 72名	小計	112名	小計	189名	小計	127名		小計	180名		680名

初等教育科だけに専門化した短大であるが、B短大は他の学科の中に保育科を含む短大であった。商業系では、A短大は名古屋市内、B短大は東京地区にあり、複数の学科からなっている短大である。看護系は公立の看護短大・看護専門学校と私立の看護専門学校からなっていた。被調査者は原則として1年生から選ばれたが、一部2年生から得られたデータも利用された。表1には最終的に分析の対象となった有効データの数を示した。以後の分析における専門ごとの比較は、表1に示した5つの系に従って行われる。

調査は質問紙法により、1985年12月中旬から1986年2月上旬にかけて実施された。

2. 質問紙の内容と尺度の構成

質問紙調査における調査項目は、図1に示したような職業興味と進路選択過程の構造を明らかにする項目からなっている。具体的には、職業社会化過程を外的に規定する要因、青年中期までの性役割社会化経験に関わる諸尺度、現在（青年後期）の職業意識と自己概念に関わる諸尺度に大別される。以下、これらの内容について詳しくみていくことにする。

(1) 外的規定要因に関する調査項目

①短大入学状況および家族の状況に関する項目として、入学志望順位・入学方法、父母の学歴と職業・家庭の社会経済的地位がたずねられた。これらは、若林他（1985）において利用されたものと同一である。

②両親からの影響力：影響力の程度を測るため、子どもの頃、両親に対しどの程度「好意的感情」をいただいていたか、両親をどの程度「身近に感じていた」か、どれだけ「両親の職業を誇りに思っていた」か、自分の将来を考える上で「両親の考え方や生き方」がどの程度参考になっているか、また、「女性に生まれて幸福であるか」どうか、5段階評定を用いて測定された。

(2) 性役割社会化経験に関わる諸尺度

①両親からの性別しつけ：子どもの頃の両親からのし

つけ（父・母別々に）が「女の子」ということを意識したものであったか、それとも「男の子」のようなしつけであったかが、5段階評定で調べられた。

②子どもの頃の期待された人間像：鹿内他（1982）によって開発された Masculinity-Femininity (M-F) スケールを用いて、子どもの頃求められていた態度や性格が調査された。この測度は、男らしさ (M) の特性語 (形容詞) 9語と女らしさ (F) の特性語 9語を中心とした23語の形容詞から構成されており、被調査者は、これらの形容詞に対して、子どもの頃まわりの人たちからそれぞれの特性がどの程度求められていたかを、7点法で回答することが求められた。この測度からはM得点とF得点の2尺度が作成される。

③子どもの頃のしつけ：柏木他（1973）および柏木他（1975）によって作成されたしつけ経験測度を参考にして、子どもの頃両親がどのような方針でしつけを行ったかを回答させた。この測度は、鹿内他（1982）によって開発されたM-Fスケールに用いられた形容詞を行動レベルに置き直したステートメント（例えば、「頼もしい」）に対応して、「大人らしい行動や考えがとれるように求める」などから構成されている。被調査者は、これらのステートメントに対して、子どもの頃両親からどの程度求められたり、経験させられたかを4点法（「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」まで）で回答することを求められた。

④中学・高校時代の学校生活経験：Owens and Schoenfeldt (1979) は、個人背景要因 (biographical data 又は簡略化して biodata) を分析するために、個人背景質問紙を作成して実施した。そして、その資料を因子分析して10数個の因子を見出している。それらの因子は、例えば男子の場合、①親子関係のあたたかさ、②情緒的成熟、③知性主義、④学業成績、⑤社会的外交、⑥科学的関心、⑦社会・経済的地位、⑧独立・支配、⑨両親の支配、⑩文学・歴史の関心に関する過去の経験として分類された。また女子の場合には、①親子関係のあ

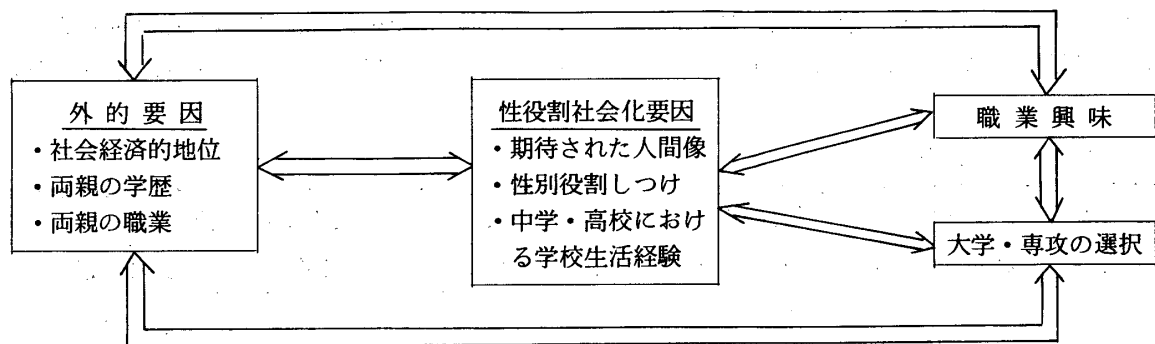


図1 職業興味の形成と進路選択の過程

たたかき、②リーダーシップ、③学業成績、④両親の支配、⑤文化・文学的関心、⑥科学的・芸術的関心、⑦社会・経済的地位、⑧否定的感情の表出、⑨テレビ、⑩体育活動である。

本研究では、彼らの研究で得られた因子分析の結果を参考にして、中学・高校の頃に経験するであろう学校生活の諸側面を記述する56のステートメントが用意された。被調査者は、それぞれの項目に対して、自分の学校生活の中でどの程度経験したかを、5点法（「非常に経験した」から「まったく経験しなかった」まで）で回答することが求められた。

（3）現在の職業意識と自己概念に関わる諸尺度

①職業興味：女性向きの職業に対する興味を調べる目的で、可能な限り多数の女性向き職業名のリストが作成された。女性向きの職業名は、有馬真喜子（1982）などの女子短大生や大学生向けの職業選択ガイドブックから集められた。そして、最終的に97の職業名が選ばれ、被調査者はそれぞれの職業名に対して、「非常に興味がある」「少し興味がある」「あまり興味がない」「まったく興味がない」の4点尺度によって、興味の度合を回答することを求められた。

②職業志向：若林他（1984）で作成された職業志向尺度が用いられた。職業志向とは、人々が仕事の上で求めるものであり、具体的には各種労働条件、職場の人間関係、仕事のやりがいなどに関する30項目が呈示された。被調査者は将来自分がつきたい、ないしつくことになっている職業において、これらの要因がどの程度職業の条件として備わっている必要があるかを、5点法（「非常にたくさんあってほしい」「かなりたくさんあってほしい」「普通以上にあってほしい」「普通にあってほしい」「普通以下でよい」）で回答することが求められた。

③M-Fスケール：鹿内他（1982）によって開発された Masculinity-Femininity (M-F) スケールが用いられた。この測度は、男らしさ (M) の特性語 (形容詞) 9語と、女らしさ (F) の特性語 9語を中心とした23語の形容詞から構成されており、被調査者は、これらの形容詞に対して、「学生生活における現在の自分自身」がどの程度よくあてはまるかを、7点法で回答することが求められた。

3. 分析の手続き

本研究の目的は、青年中期までの性役割社会化経験の内容を専攻別に比較検討すること、および青年後期における職業興味や自己概念と専攻との関連を検討することである。この目的のために、①性役割社会化経験に関わる諸尺度の平均値を専攻グループの間で比較すること、

②性役割社会化経験に関する諸変数と個人の生活史を規定する要因の内容を分類し、その結果にもとづいて、各専攻グループの特徴を記述すること、③青年後期における職業興味や自己概念に関する諸尺度の平均値を専攻グループの間で比較すること、④職業意識と自己概念の諸変数の内容を分類し、その結果にもとづいて各専攻グループの特徴を記述することが試みられた。

主な統計的分析の方法として、分散分析、林の数量化理論第Ⅲ類、重回帰分析（三宅他、1977）が用いられた。分散分析は、各尺度平均値を専攻別に検討するために実施された。一方、林の数量化理論第Ⅲ類は、性役割社会化経験に関する諸変数と規定要因のパターン分類、ならびに、職業意識と自己概念の諸変数パターン分類を行うために用いられた。そして、専攻別に平均スコアが求められ、専攻グループ間で比較が行われた。重回帰分析は、職業興味の下位尺度と職業志向、自己概念、性役割社会化経験の諸変数との間の関係を解明する手段として用いられた。この分析方法によって職業興味の下位尺度ごとに特徴が明らかにされる。

Ⅲ. 結果 I : 尺度の検討

1. 性役割社会化経験に関わる諸尺度

①子どもの頃の期待された人間像：方法の項で述べたように、本尺度は、鹿内他（1982）で作成されたM-Fスケールを参考にしている。そこで彼女らの場合と同じように、まずM特性9項目およびF特性9項目について、それぞれ合計得点と各項目の得点との相関係数を求めた。M特性の場合 $r = .32$ から $r = .60$ 、F特性の場合 $r = .21$ から $r = .57$ と、有意に高い相関が得られた。その結果、標準化された α 係数は、M特性では .806、F特性では .750と満足すべき高い値を示した。両得点とも高い内的整合性を有しているといえる。なお、M、F両尺度間の相関は $r = .350$ ($p < .001$) であった。

②子どもの頃のしつけ経験：今回の調査のため、新たに25項目を用いて、子どもの頃の性役割にかかわるしつけ経験をしらべる測度が作成された。表2はこの測度を構成する項目と、因子分析（主因子法-バリマックス回転）の結果を示したものである。第1因子は、対人関係への配慮と服装などの身だしなみへの配慮についてのしつけを意味する項目からなっている。そこでこの因子は「女性役割」と命名された。第1因子の内容は柏木（1972）が見出した美と服従という女性役割の内容に対応していると考えられた。一方、第2因子は、主体性と自主性を育てるしつけ内容の項目で高い負荷量が見出されている。そこで第2因子は「男性役割」と命名された。

これら2つの尺度について内的整合性と信頼性を検討

表2 子どもの頃のしつけ経験測度の因子分析の結果 (N = 680)

項目番号	項目	因子	第I因子 女性役割	第II因子 男性役割	共通性 (h ²)
19	美しく装うようにいう。		.564	.040	.320
18	社交的で愛嬌のある子であるようにという。		.553	.194	.343
2	皆からかわいがられ、愛される子になるようにいう。		.483	.142	.253
10	お祝いやお祭りなどにはおしゃれさせる。		.470	-.066	.255
4	服装や身のまわりのことに細かく気をつかうようにいう。		.457	.174	.239
16	出しゃばらずつつましい態度をとらせる。		.451	.162	.230
14	ていねいな言葉や礼儀作法を守ることを求める。		.430	.293	.271
12	無神経で無愛想な態度をとらないことを求める。		.426	.293	.267
25	けんかや争いはさけるようにという。		.372	.016	.139
24	異性との交際に注意を与える。		.334	.037	.113
13	多少、無理なことでも自分でやらせる。		.059	.633	.404
7	自分で考えさせ、自分で決定させる。		-.037	.602	.364
23	自分の身の回りのことは、自分でやらせる。		-.015	.598	.358
17	自分で計画したり、目標をたてることを求める。		.283	.515	.345
9	社会の事に目を向けさせる。		.200	.452	.244
11	大きな望みを持たせ、それに向かって努力させる。		.315	.422	.277
3	大人らしい行動や考えがとれるように求める。		.184	.398	.192
6	お茶を入れたり料理やお客さんの接待を手伝わせる。		.185	.396	.176
1	欲しいものは自分でお金をためて買わせる。		-.072	.323	.110
(残余項目)					
5	皆から信頼されるようにという。		.406	.337	.278
8	細やかな心づかいをするように求める。		.439	.390	.345
15	おけいこや勉強など、最後までやり通すことを求める。		.326	.414	.278
20	帰宅時間についてやかましくいう。		.239	.019	.057
21	スポーツを大いに奨励する。		.170	.262	.098
22	臆病な態度をしかる。		.265	.185	.104
分散			3.024	3.006	6.030
(%)			(12.098)	(12.025)	(24.120)

するために、合計得点と個別項目得点との相関係数および標準化されたα係数が計算された。前者については、女性役割の場合に $r = .24$ から $r = .50$ の範囲の値を、男性役割の場合に $r = .25$ から $r = .55$ の範囲の値をとっており、いずれも有意な値であった。またα係数はそれぞれ .737, .743 の値を得ており、2つの尺度とも信頼のできる尺度が構成されたと考えられた。なお2つの尺度の間の相関係数は $r = .373$ ($p < .001$) であった。

③中学・高校における学校生活経験：表3は、中学・高校における学校生活での諸経験の程度をしらべる項目と因子分析(主因子法-バリマックス回転)の結果を示したものである。第1因子は、学校での教科にとらわれ

ないで、興味や関心のある事柄に傾注する経験にかかわる項目で負荷量が高い。そこでこの因子には「文化と教養」という名称が与えられた。第2因子は、社交的でクラスの皆から好意を持たれていた経験にかかわる項目で負荷量が高く、「クラスの人気者」因子と命名された。第3因子は、クラブ活動とくに運動クラブでの中心的役割の経験に関する項目からなっていた。そこで第3因子は「リーダーシップ」因子と命名された。第4因子は、「流行追随」の因子と考えられた。第5因子は学校での勉強や学業成績の優秀さに関する項目で負荷量が高く、「学業成績優秀」の因子と命名された。

因子分析の結果にもとづいて構成された5つの尺度の

表3 中学・高校における学校生活経験測度の因子分析の結果 (N=680)

項目番号	項目	因子	第I因子 文化と 教養	第II因子 クラスの 人気者	第III因子 リーダー シップ	第IV因子 流行追随	第V因子 学業成績 優秀	共通性 (h ²)
40	絵画や彫刻などの芸術作品にひかれた。		.665	-.144	-.050	-.021	-.073	.471
8	社会や政治の動きに関心をもった。		.651	-.034	.093	-.020	.060	.438
41	新聞記事や大人の話に関心をもった。		.630	-.072	.067	.120	.013	.421
52	どうしたら社会がよくなるか自分なりに考えた。		.628	-.129	.074	.012	.020	.417
44	小説や文学作品を読むのが好きだった。		.579	-.096	-.000	-.008	-.044	.346
7	文学や音楽鑑賞が好きだった。		.554	-.057	.013	.071	-.049	.318
51	芸術家にあこがれた。		.550	-.159	-.087	.070	-.093	.349
46	科学の話や科学者の伝記をよく読んだ。		.528	-.065	.071	-.054	.057	.294
30	社会問題について友人とよく議論した。		.524	.036	.074	.061	.028	.286
19	社会科は得意であった。		.403	.072	-.040	.059	.116	.186
*29	音楽や美術の時間はいつもたいくつだった。		.323	.098	-.066	-.116	.008	.132
*39	人とき合うのがへただった。		-.124	.758	.058	.087	-.027	.602
*50	なかなか友人がくれなかった。		-.111	.627	.129	.004	.010	.422
*38	みんなと喋りしよに何かやるのは苦手だった。		-.108	.619	.212	-.074	-.018	.446
*42	地味な性格だった。		-.243	.580	.064	.268	.060	.475
20	クラスではいつも人気者だった。		.172	.553	.191	.403	.117	.548
*31	クラスでは自分の思っていることがいえなかった。		-.035	.499	.117	.004	.061	.268
28	みんなから好かれる性格だった。		.113	.492	.163	.282	.094	.370
*34	クラスの行事では自分がリーダーシップをとることはあまりなかった。		-.027	.456	.253	-.011	.201	.313
53	冗談など喋っていていつもみんなを笑わせた。		.101	.455	.101	.298	-.022	.317
*55	家では一人でぼんやりと時間をすごすことが多かった。		-.227	.381	-.003	-.066	.024	.202
5	クラブ活動に熱中した。		.015	.001	.667	-.053	.083	.455
16	クラブ活動ではしばしば自分が中心だった。		.101	.129	.659	.185	.107	.507
27	クラブの部員をひっぱっていくのに苦労した。		.109	-.017	.636	.093	.118	.439
25	スポーツ大会での上位人賞や優勝を経験した。		.048	.158	.613	.164	.051	.433
14	体育大会や競技会にしばしば出場した。		.042	.151	.581	.052	-.061	.369
*47	はげしい運動やスポーツは苦手であった。		-.111	.274	.547	-.054	-.012	.390
36	スポーツマンらしい態度や行動が好きだった。		.065	.141	.519	.150	-.027	.317
*3	体育の時間はゆううつであった。		-.092	.281	.491	-.082	-.035	.336

1	クラスの行事には積極的に参加した。	.113	.289	.473	.052	.105	.334
*49	他のことで忙しくてクラブ活動はできなかった。	-.077	.024	.348	-.244	.108	.199
21	いつも流行に敏感だった。	.053	.244	-.014	.728	-.010	.593
32	派手な服装を楽しんだ。	-.039	.093	.039	.654	-.049	.442
9	服装など、自分らしいおしゃれにいつも気をつかった。	-.003	.172	.048	.640	-.009	.442
43	かっこよいくことが好きだった。	.050	-.034	.140	.472	.016	.246
10	アイドル歌手にあこがれていた。	-.152	.015	.047	.419	-.069	.206
33	家に帰ると近所の友人とおそくまで遊んだ。	.002	.153	.063	.347	-.104	.159
14	成績はいつもクラスの上位であった。	.178	-.033	.148	.025	.719	.572
*15	勉強は得意ではなかった。	.003	.077	-.061	-.115	.637	.429
48	両親は自分の学業成績に満足していた。	.161	-.057	.062	-.022	.615	.412
26	勉強の目標はいつも高いところに置いていた。	.218	-.041	.214	.117	.406	.274
(残余項目)							
2	理科の実験や化学の授業が好きだった。	.292	.043	.164	-.097	.136	.142
6	人間関係にはいつも気をくばっていた。	.251	-.030	.303	.111	.018	.168
11	塾や学校の勉強に忙しく自分の時間が持てなかった。	.003	-.170	-.026	.168	.021	.041
12	人と競争するのが嫌だった。	-.039	.075	.058	-.042	.233	.067
13	天体や星座の観察に熱中した。	.341	-.048	.061	-.041	-.087	.132
17	人に親切にするのが好きだった。	.224	.083	.253	.123	-.054	.139
18	楽器の演奏に熱中した。	.283	.103	.076	.038	.082	.105
22	おけいこ事や自分の趣味に熱中した。	.264	.055	.129	.214	.048	.137
23	学級委員になってみんなをリードした。	.228	.242	.320	.111	.385	.373
24	化石や古代の遺物に興味があった。	.580	-.048	-.005	-.007	.045	.341
35	数学はにがてであった。	-.145	.042	.050	-.155	.236	.105
37	自分にとって学校の成績はあまり重要ではなかった。	-.109	-.056	-.114	-.100	.254	.103
45	クラスのみんなから信頼されていた。	.266	.354	.167	.211	.259	.336
54	しばしばみんなの注目の的になった。	.199	.440	.280	.349	.078	.439
56	英語はにがての科目だった。	-.043	.128	-.033	.073	.266	.095
		4.831	4.047	3.960	2.887	2.168	17.894
		(8.627)	(7.227)	(7.071)	(5.155)	(3.871)	(31.951)
		分		散		(%)	

(注) 表中, *印の項目は符号反転項目であることを表わす。

表4 中学・高校における学校生活経験の下位尺度間相関 (N=680)

下位尺度	文化と教養	人気者	リーダーシップ	流行追随	学業優秀
文化と教養	(.83)				
人気者	-.15***	(.83)			
リーダーシップ	.03	.38***	(.83)		
流行追随	.00	.30***	.16***	(.75)	
学業優秀	.20***	.05	.18***	-.03	(.71)

() 内はα係数を示す。***印はp<.001であることを表わす。

内的整合性と信頼性を検討するために、合計得点と個別項目得点との相関および標準化されたα係数を求めた。前者の相関係数は全体を通じr=.29からr=.69の範囲の値をとっていた。また、α係数は表4に示したように.707から.831と高く、以上の結果から5つの尺度はいずれも信頼性の高い尺度として構成されたと考えられた。

5つの下位尺度間相関は表4に示したとおりである。表から明らかなように、文化と教養経験は人気者経験との間に有意な負の相関が、また学業成績優秀経験との間に有意な正の相関が得られた。人気者経験はリーダーシップ経験および流行追随経験との間に有意な正の相関を示した。さらにリーダーシップ経験は、流行追随経験および学業成績優秀経験との間に有意な正の相関を有していた。このように、5つの下位尺度間には、リーダーシップ=学業成績優秀=文化と教養という結びつきとリーダーシップ=人気者=流行追随という結びつきの2つの流れがあることがわかる。

2. 職業興味の尺度

女子大生の職業興味を調べるために、97の職業名を変数として用いた測度が作成された。表5は、それら職業名と因子分析(主因子法-バリマックス回転)の結果を示している。因子分析の結果、8因子が抽出された。第1因子は、電子計算機会社事務員、出版会社事務員、税理士、司法書士、図書館司書などの職業での因子負荷量が高く、「事務的専門職」の因子と命名された。第2因子は、ヘアデザイナー、服飾デザイナー、インテリアデザイナーなどの職業での負荷量が高い。そこで第2因子は、「服飾・商業美術職」の因子と命名された。第3因子は、自動車セールス・ウーマン、保険セールス、自動車整備士、生産工程技能者などの職業での負荷量が高い。これらの内容から第3因子は「販売・現業職」の因子と命名された。第4因子は、理学療法士、臨床検査技師、

医師、看護婦などの職業での負荷量が高く、「医療・社会福祉職」の因子と命名された。第5因子は、新聞記者、編集者、放送ライターなどのマスコミ関係の職業での負荷量が高く、「マスコミ職」の因子と命名された。第6因子は、受付・案内嬢、ホテル・フロント係、ショールーム・ガールなど接客業務に関する職業での負荷量が高い。そこで第6因子は「窓口サービス職」の因子と命名された。第7因子は、幼稚園・小学校の先生、保育士、児童福祉施設職員など教育機関や福祉施設での指導者に関わる職業での負荷量が高いので、「教育職」の因子と命名された。さいごの第8因子は、同時通訳、通訳ガイドでの負荷量が高く、「語学専門職」の因子と命名された。これら8つの因子で全体の分散の44.70%が説明されている。

以上の因子分析の結果にもとづいて、8つの下位尺度が構成された。尺度の内的整合性を検討するために合計得点と個別項目得点との相関を求めたところ、全体を通じr=.37からr=.74の範囲の値が得られた。また、各尺度の信頼性を検討するために標準化されたα係数を求めたところ、表6に示したように、.75から.92の範囲の値が見出された。これらの結果から、8つの下位尺度について、いずれも高い信頼性を有する尺度が構成されたと考えられた。

つぎに、8つの下位尺度間相関をみとめる。表6に示したように、窓口サービス職と医療・社会福祉職および教育職との間に、また教育職と語学専門職との間にゼロの相関がある以外、他のすべての組合せにおいて有意な正の相関が得られている。表6から.40以上の組合せに注目してみると、事務的専門職と販売・現業職およびマスコミ職、服飾・商業美術職と販売・現業職および窓口サービス職、販売・現業職と窓口サービス職、そして医療・社会福祉職と教育職との間での相関がとくに高いことがわかる。

女子短大生における性役割社会化と職業興味

表5 職業興味測度の因子分析の結果 (N=680)

項目番号	因子項目	第I因子 事務的 専門職	第II因子 服飾・商 業美術職	第III因子 販売・ 現業職	第IV因子 医療・社 会福祉職	第V因子 マスコミ 職	第VI因子 窓口サー ビス職	第VII因子 教育職	第VIII因子 語学 専門職	共通性 (h ²)
96	電子計算機会社事務員	.664	.074	.214	.091	-.029	.090	-.085	-.006	.517
72	経理事務員	.652	.095	.251	.026	-.069	.190	-.065	-.071	.548
37	出版会社事務員	.621	.132	.165	-.137	.266	.164	-.019	-.042	.549
75	総合商社事務員	.613	.039	.209	-.137	-.020	.318	-.207	.029	.585
97	税理士	.606	.115	.134	.260	.013	.054	-.059	.067	.477
93	司法書士	.594	.133	.117	.293	.093	.057	.018	.214	.528
80	広告会社事務員	.585	.194	.215	-.181	.200	.193	-.120	-.014	.551
28	図書館司書	.571	-.044	.080	.086	.138	-.132	.202	.158	.444
19	国会図書館職員	.566	-.051	.114	.084	.197	-.130	.163	.125	.441
78	国家公務員	.560	-.012	-.027	.125	-.036	.146	.269	.065	.429
51	国税専門官	.557	.083	.169	.296	.108	.036	-.042	.041	.450
20	学校事務職員	.540	-.109	.118	-.007	-.002	.115	.344	.036	.450
3	保険会社事務員	.497	.022	.186	-.003	-.049	.380	-.087	-.062	.440
11	地方公務員	.497	-.124	.006	.063	-.049	.097	.303	.059	.373
84	医療保険事務員	.497	.063	.113	.371	-.106	.153	.086	-.004	.443
83	研究所職員	.479	.150	.165	.271	.171	-.133	-.017	.085	.407
89	社会保険労務士	.475	.150	.377	.262	.064	.102	.053	.010	.476
26	プログラマー	.435	.204	.123	.073	.172	-.006	-.201	.108	.333
27	家庭裁判所調査官	.431	.035	.190	.334	.270	-.064	.048	.132	.431
35	裁判所書記	.420	.002	.128	.260	.238	.008	.073	.228	.374
25	消費生活アドバイザー	.390	.244	.256	.170	.107	.030	.073	-.042	.326
40	ヘアデザイナー	-.060	.737	.063	.153	.158	.185	-.005	.010	.633
24	服飾デザイナー	-.024	.728	.053	.066	.240	.117	-.106	-.032	.621
74	インテリアデザイナー	.092	.713	.074	.026	.217	.036	-.118	-.004	.585
54	ブティック経営者	-.081	.644	.069	.064	.183	.271	-.057	-.038	.542
82	美容師	-.008	.624	.115	.155	-.021	.126	.126	.060	.462
60	ファッションモデル	-.088	.568	.059	.159	.151	.374	-.011	.190	.534
48	商業デザイナー	.211	.566	.265	.040	.231	.029	-.041	-.039	.494
32	きものコンサルタント	.100	.523	.152	.082	.089	.190	.086	.059	.368
81	人形作家	.253	.509	.174	.082	.203	-.265	.237	.083	.535
66	和裁・洋裁	.141	.499	.135	.062	-.283	.024	.161	.031	.398
91	少女マンガ家	.026	.498	.185	.108	.242	-.094	.083	.133	.387
77	舞踊家・バレエダンサー	.040	.451	.069	.184	.135	.070	.129	.229	.336
59	喫茶店経営者	.056	.446	.228	-.038	.015	.234	.086	-.029	.319
95	茶道家・華道家	.247	.417	.111	.159	-.054	.007	.135	.202	.334
90	演奏家(音楽家)	.049	.376	.173	.118	.229	-.043	.134	.180	.292
68	洋菓子製造	.171	.357	.144	.044	-.131	.024	.252	.132	.278
33	自動車セールスマン	.178	.094	.660	.023	.217	.197	.003	-.046	.565
57	自動車整備士	.201	.108	.570	.236	.041	-.037	-.022	.090	.444
41	保険セールスマン	.216	.139	.568	.116	.089	.192	.102	-.069	.462
73	パートの店員	.190	.197	.546	-.023	-.223	.091	.177	.078	.469
62	テレビ・ラジオ修理技士	.223	.173	.545	.236	.141	-.091	-.020	.113	.474
42	生産工程技能者	.315	.184	.540	.232	-.005	-.066	-.004	.008	.483
17	販売士	.188	.149	.529	-.001	.081	.237	.087	-.009	.408
46	デパート売場主任	.173	.223	.521	-.017	-.058	.246	.138	-.035	.436
76	スーパーのレジ主任	.182	.124	.518	-.051	-.185	.133	.241	.025	.430
94	パートの事務員	.365	.133	.465	-.079	-.183	.183	.178	.082	.479
34	システムエンジニア	.252	.123	.449	.242	.141	-.035	-.167	.084	.395
29	理学療法士	.135	.071	.114	.712	.050	-.114	.042	-.047	.563
53	臨床検査技師	.163	.041	.037	.707	.016	-.112	.099	-.043	.554
5	医師	-.043	.128	.024	.652	.156	.004	.100	.162	.505
21	看護婦	-.228	.138	.038	.643	-.077	.009	.254	-.015	.557
13	薬剤師	.200	.066	-.058	.581	-.038	.016	.072	.087	.400
87	歯科技工士	.244	.173	.173	.529	-.011	.105	.050	.092	.421
71	ケースワーカー	.120	.103	.122	.471	.123	-.168	.319	-.052	.410
52	カウンセラー	.174	.157	.098	.379	.269	-.077	.229	.049	.341
45	栄養士	.181	.172	.186	.364	-.152	-.002	.209	-.003	.296
43	婦人警察官	.043	.122	.136	.360	.100	.171	.233	.160	.284
7	新聞記者	.151	.131	.051	.093	.696	-.016	.008	.115	.549
15	編集者	.197	.287	-.005	-.015	.658	-.039	-.046	.121	.573
23	放送ライター	.133	.363	.058	.021	.593	.130	.017	.090	.530
39	アナウンサー	.065	.282	-.009	.064	.584	.343	.071	.204	.593

	原				著				
47 レポーター	.036	.245	.047	.060	.574	.342	.046	.051	.518
55 ディスクジョッキー	-.021	.431	.039	.079	.532	.317	.066	.060	.585
65 作家	.150	.384	.040	.079	.518	-.229	.083	.170	.534
30 受付・案内係	.215	.081	.162	-.111	-.026	.616	.056	.119	.489
64 ホテル・フロント係	.155	.188	.222	-.108	.112	.563	.004	.177	.481
38 ショールーム・ガール	.095	.285	.209	-.021	.176	.510	.050	.027	.429
56 銀行員	.326	.069	.156	-.027	-.190	.453	.190	-.082	.420
1 秘書	.253	.076	-.076	.013	.075	.412	-.081	.253	.322
4 幼稚園・小学校の先生	-.084	.030	.018	.062	.007	.104	.712	-.045	.532
63 保母	-.113	.118	.045	.060	-.055	.084	.705	-.091	.548
58 児童福祉施設職員	.153	.018	.042	.229	.002	-.133	.679	-.099	.566
69 養護学校の先生	-.009	.043	.017	.366	-.003	-.098	.633	-.143	.567
12 中学校・高校の先生	.136	-.047	.027	.241	.244	-.036	.492	.089	.390
10 通訳	.072	.132	.012	.095	.237	.061	-.105	.699	.591
14 通訳ガイド	.108	.142	-.016	.137	.271	.121	-.071	.677	.602
2 英文タイピスト	.192	.094	.066	-.053	-.056	.237	-.059	.389	.267
(残余項目)									
6 スチュワーデス	-.064	.183	-.010	.211	.194	.389	.033	.426	.454
8 イラストレーター	.058	.499	.055	.023	.412	-.143	-.004	.003	.446
9 自動車会社事務員	.450	-.034	.320	-.116	.059	.404	-.089	-.079	.500
16 食品会社事務員	.466	.046	.379	-.076	-.007	.224	.000	-.080	.425
18 トレーサー	.305	.243	.318	.096	.118	.046	-.048	.074	.286
22 観光バスガイド	-.009	.226	.253	.125	.205	.322	.270	.104	.360
31 コピーライター	.119	.507	.069	-.003	.461	.104	-.048	.098	.511
36 音楽教師	.068	.227	.223	.092	.164	.031	.292	.076	.233
44 スキー指導員	.087	.243	.278	.222	.129	.183	.026	.138	.263
49 市場調査員	.466	.140	.395	.211	.147	-.005	.085	-.004	.466
50 建築士	.221	.363	.254	.289	.172	-.157	-.097	.104	.403
61 航空会社事務員	.437	.117	.132	-.072	.085	.498	-.161	.247	.569
67 ホームヘルパー	.054	.264	.282	.218	-.032	-.018	.363	-.003	.333
70 弁護士	.343	.168	.030	.406	.271	.048	.011	.248	.449
79 プロゴルファー	.140	.265	.167	.162	.214	.177	-.024	.248	.283
85 書道家	.245	.324	.110	.119	-.043	-.010	.181	.132	.243
86 旅行業務取扱主任	.320	.243	.198	.012	.205	.257	-.123	.248	.386
88 大学の先生	.324	.155	.085	.298	.283	-.014	.239	.192	.399
92 専業主婦	.010	.134	.055	-.017	-.240	.232	.250	.025	.196
分散	9.175	7.821	5.459	5.334	4.969	4.142	4.006	2.455	43.361
(%)	(9.459)	(8.063)	(5.627)	(5.499)	(5.123)	(4.271)	(4.130)	(2.531)	(44.703)

表6 職業興味測度の下位尺度間相関 (N=680)

下位尺度	事務的専門職	服飾・商業美術職	販売・現業職	医療・社会福祉職	マスコミ職	窓口サービス職	教育職	語学専門職
事務的専門職	(.917)							
服飾・商業美術職	.322***	(.893)						
販売・現業職	.454***	.580***	(.873)					
医療・社会福祉職	.358***	.364***	.320***	(.845)				
マスコミ職	.541***	.314***	.224***	.235***	(.877)			
窓口サービス職	.362***	.430***	.416***	.051	.293***	(.745)		
教育職	.163***	.134***	.156***	.414***	.088*	.015	(.826)	
語学専門職	.272***	.267***	.167***	.153***	.368***	.278***	-.058	(.763)

注) () 内の数字は α 係数を表わす。* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$ 。

3. その他の尺度

①M-Fスケール：M特性9項目と合計得点、およびF特性9項目と合計得点との相関係数を算出したところ、それぞれ $r = .43$ から $r = .67$ 、および $r = .28$ から $r = .60$ の範囲の値を示した。また標準化された α 係数も、それぞれ $.855$ と $.777$ と高く、両尺度の内的整合性は満足すべき水準にあるといえる。

②職業志向：職業志向性は職務挑戦、人間関係、そして労働条件の3つの下位尺度を含んでいる。これら各々について、合計得点と個々の項目との相関係数を求めたところ、 $r = .29$ から $r = .71$ の範囲の値となった。また標準化された α 係数は、それぞれ $.890$ 、 $.711$ 、 $.733$ と高く、これら尺度の内的整合性は、満足すべき水準にあるものといえる。

③同一視尺度：両親からの影響力を調べる項目のうち「好意的感情」「親近感」「生き方を参考にした程度」の3項目を用いて父、母それぞれについての同一視尺度を作成した。父と母について、合計得点と個別項目得点との相関係数を求めたところ、父については $r = .30$ から $r = .53$ 、母については $r = .26$ から $r = .45$ の範囲の値が得られた。また、標準化された α 係数は、それぞれ $.619$ と $.588$ を示した。以上のように2つの下位尺度とも尺度の内的整合性は、おおむね満足すべき水準にあるといえる。

以上、本研究での分析のための諸尺度を検討してきたが、全体として性役割社会化経験で9つ、職業興味で8つ、自己概念で2つ、職業志向で3つ、規定要因で1つと計23の尺度がほぼ満足すべき状態で作成された。以後の分析においては、各尺度を構成する項目ごとに合計点が算出され、それを項目数で除した平均値を用いて、分析の作業が進められる。

結果Ⅱ：性役割社会化経験と大学の専攻および家庭環境の関係

これまで女子短大生の性役割意識や職業意識の発達、および職業選択過程に関する一連の研究を進めてきたが、その中で、専攻、性役割観、職業意識や職業選択の3者の間には相互に強い関連性のあることが明らかにされてきた。社会の現状をみても、専攻や職業の選択には伝統的な性役割観による色分けの影響が、現在でもなおかなり強く及んでいる。

ところで性役割の学習には多くの要因が作用するが、中でももっとも強い影響を及ぼすものは、言うまでもなく親である。柏木他(1973)は、子どもの性役割学習に対する親からの働きかけを、親が意図的に行なうしつけと、親の性役割観や性役割期待が同一視やモデリングを

通して子どもに獲得される場合の2側面から捉えている。そして、小学生および中学生の性役割行動に対しては母親のしつけも性役割観もどちらもほとんど影響を与えないが、子どもの性役割観はその両者から有意な影響を受けること、また母親の影響は子どもの性および年齢によって異なることなどを明らかにしている。

ここでは女子短大生の性役割行動や性役割観に影響を及ぼしてきたと考えられる、家庭環境の諸要因、親に対する同一視、および父親と母親からのしつけや性役割期待を取り上げ、これらが専攻によってどのように異なるかを検討する。家庭環境や親のしつけや性役割期待→子どもの性役割行動や性役割観→専攻の決定、という図式が成り立てば、専攻によって家庭環境や親のしつけや性役割期待が異なることが予想されるのである。ただしここで扱った親のしつけや性役割期待は実際の親のそれではなく、被調査者が子どもの頃に受けたしつけや期待を回想したものである。したがって子どもの側が認知したものであるということと、過去を回想したものであるということの2重の歪みが入り込んでいる。そのために被調査者の回答には、親が明示的に行なったしつけと、被調査者が親の暗黙の性役割観や期待を認知したものの両方が混合されているであろう。

さらに、性役割行動あるいは性役割社会化経験の重要な1側面として、中学や高校でどのような学校生活を体験してきたかということが考えられるので、これについても専攻による差異を検討する。

1. 志望順位および入学方法と専攻

専攻によって、今の短大の志望順位や入学方法(受験入学か推薦入学か)に差がみられるかどうかを調べたものが、表7と表8である。志望順位については、全体では55%の者が第1志望、第2志望が25%、第3志望以下が20%である。しかし χ^2 検定の結果は有意であり、専攻によって差のあることがわかる。第1志望がもっとも多いのは保育で70%を占め、次いで看護が60%余りになっている。この2つは他専攻に較べて専門性が強いので、始めからそこを志望する者が多いことは肯ける。これと逆に志望順位が低いのは商業である。第3志望以下が54%を占めている。これらの者が第1、第2志望で他の専攻を目指していたのか、あるいは商業系の他大学を志望していたのかは不明であるが、とにかく今の短大に仕方なく入った者が商業ではかなりいるということはいえる。

次に入学方法をみると、これも χ^2 検定の結果、専攻によって分布に差のあることが示された。もっとも特徴的なのは、看護で外部からの受験入学が多いことである。他の4専攻では推薦入学が36~56%を占めているが、そ

表7 専攻別にみた入学志望順位の内訳

入学志望順位 専攻	全 体	第1志望	第2志望	第3志望 以下	N. A.
全 体	680 (100.0)	371 (54.6)	170 (25.0)	134 (19.7)	5 (0.7)
専 修 学 校	72 (100.0)	36 (50.0)	15 (20.8)	21 (29.2)	0 (—)
栄 養 ・ 家 政	112 (100.0)	59 (52.7)	31 (27.7)	21 (18.8)	1 (0.9)
保 育	189 (100.0)	133 (70.4)	39 (20.6)	15 (7.9)	2 (1.1)
商 業	127 (100.0)	31 (24.4)	27 (21.3)	69 (54.3)	0 (—)
看 護	180 (100.0)	112 (62.2)	58 (32.2)	8 (4.4)	2 (1.1)

$$\chi^2 = 156.094, \quad df = 12, \quad p < .000$$

表8 専攻別にみた入学方法の内訳

入学方法 専攻	全 体	外部受験	内部受験	外部推薦	内部推薦	N. A.
全 体	680 (100.0)	405 (59.6)	19 (2.8)	198 (29.1)	55 (8.1)	3 (0.4)
専 修 学 校	72 (100.0)	41 (56.9)	0 (—)	29 (40.3)	2 (2.8)	0 (—)
栄 養 ・ 家 政	112 (100.0)	71 (63.4)	0 (—)	39 (34.8)	2 (1.8)	0 (—)
保 育	189 (100.0)	81 (42.9)	0 (—)	67 (35.4)	39 (20.6)	2 (1.1)
商 業	127 (100.0)	59 (46.5)	4 (3.1)	52 (40.9)	12 (9.4)	0 (—)
看 護	180 (100.0)	153 (85.0)	15 (8.3)	11 (6.1)	0 (—)	1 (0.6)

$$\chi^2 = 171.135, \quad df = 16, \quad p < .000$$

の中で保育では内部からの推薦入学が多く、1/5 となっている。このように専攻によって入学方法に差がみられたが、その差は専攻によるものというよりも、附属高校をもっているか否か、推薦入学の枠をどれだけとっているかなど、短大の事情によるものと考えられる。

2. 家庭環境と専攻

ここでは、両親の学歴、父親の職業、および家庭の社会経済的水準が専攻によって異なるかどうかを検討する。まず、表9と表10で学歴をみると、父親と母親の両方で χ^2 検定の結果は有意であり、専攻によって親の学歴に違いのあることがわかる。相対的に父親においても母親

においても学歴が高いのは専修学校であり、父親では42%、母親では22%が短大・大学卒である。専修学校だけは東京都にあることから、地域差を反映しているのかもしれない。専修学校に次いで学歴が高いのは商業である。これに対し、もっとも低い学歴となっているのが看護であり、両親共に約半数が義務教育終了となっている。

父親の職業は表11に示されている通りである。大きく3カテゴリーに分類したところ、 χ^2 検定の値はあまり高くはないが有意となった。専修学校では他専攻にくらべて会社員が多く、また看護では公務員・専門的職業が多くなっている。家政、保育、商業では他の2専攻にくらべて自営業が多い。なお、母親の職業も、有職、パー

女子短大生における性役割社会化と職業興味

表9 専攻別にみた父の学歴

専攻	父の学歴	全 体	義務教育 終 了	高 校 卒	短大・ 大学卒	N. A.
全 体		680 (100.0)	243 (35.7)	291 (42.8)	136 (20.0)	10 (1.5)
専修学校		72 (100.0)	18 (25.0)	24 (33.3)	30 (41.7)	0 (—)
栄養・家政		112 (100.0)	39 (34.8)	51 (45.5)	22 (19.6)	0 (—)
保 育		189 (100.0)	61 (32.3)	95 (50.3)	29 (15.3)	4 (2.1)
商 業		127 (100.0)	32 (25.2)	58 (45.7)	35 (27.6)	2 (1.6)
看 護		180 (100.0)	93 (51.7)	63 (35.0)	20 (11.1)	4 (2.2)

$\chi^2 = 60.319, df = 12, p < .001$

表10 専攻別にみた母の学歴

専攻	母の学歴	全 体	義務教育 終 了	高 校 卒	短大・ 大学卒	N. A.
全 体		680 (100.0)	275 (40.4)	334 (49.1)	63 (9.3)	8 (1.2)
専修学校		72 (100.0)	15 (20.8)	40 (55.6)	16 (22.2)	1 (1.4)
栄養・家政		112 (100.0)	50 (44.6)	55 (49.1)	5 (4.5)	2 (1.8)
保 育		189 (100.0)	77 (40.7)	98 (51.9)	13 (6.9)	1 (0.5)
商 業		127 (100.0)	38 (29.9)	73 (57.5)	16 (12.6)	0 (—)
看 護		180 (100.0)	95 (52.8)	68 (37.8)	13 (7.2)	4 (2.2)

$\chi^2 = 48.554, df = 12, p < .001$

表11 専攻別にみた父の職業の内訳

専攻	父の職業	全 体	公務員・専 門的職業	会社勤務	自 営 業	そ の 他	N. A.
全 体		680 (100.0)	247 (36.3)	233 (34.3)	161 (23.7)	31 (4.6)	8 (1.2)
専修学校		72 (100.0)	26 (36.1)	32 (44.4)	11 (15.3)	3 (4.2)	0 (—)
栄養・家政		112 (100.0)	40 (35.7)	34 (30.4)	31 (27.7)	3 (2.7)	4 (3.6)
保 育		189 (100.0)	63 (33.3)	66 (34.9)	50 (26.5)	8 (4.2)	2 (1.1)
商 業		127 (100.0)	38 (29.9)	50 (39.4)	34 (26.8)	4 (3.1)	1 (0.8)
看 護		180 (100.0)	80 (44.4)	51 (28.3)	35 (19.4)	13 (7.2)	1 (0.6)

$\chi^2 = 27.462, df = 16, p < .04$

表12 専攻別にみた家庭の状況

専攻	家庭の状況	全 体	中の上以上	中の中	中の下以下
全 体		680 (100.0)	114 (16.8)	403 (59.3)	163 (24.0)
専 修 学 校		72 (100.0)	10 (13.9)	37 (51.4)	25 (34.7)
栄 養・家 政		112 (100.0)	16 (14.3)	61 (54.5)	35 (31.3)
保 育		189 (100.0)	31 (16.4)	129 (68.3)	29 (15.3)
商 業		127 (100.0)	35 (27.6)	75 (59.1)	17 (13.4)
看 護		180 (100.0)	22 (12.2)	101 (56.1)	57 (31.7)

$\chi^2 = 38.091, df = 8, p < .000$

ト、無職の3カテゴリーに分類したが、 χ^2 検定の結果は有意ではなかった。

最後に家庭の社会経済的水準をみてみよう。回答はかなりの程度、家庭の実際的水準を反映していると考えられるが、被調査者個人の判断基準の違いなどもあり、あくまでも被調査者が感じているレベルである。また9段階で回答を求めたが、分布に偏りがあり、上流と回答した者は僅かであったので、「中の上以上」、「中の中」、「中の下」以下の3カテゴリーにまとめた。表12に示されているように、全体では約6割の者が「中の中」と答えており、中流（意識）が強くなっている。また χ^2 検定の結果が有意となり、専攻による差異もみられる。相対的に家庭の社会経済的水準を高く感じているのは商業である。保育ではとくに「中の中」が多く、7割弱に達している。専修学校、家政、看護では他の2群より低く、3割余りが「中の下」以下と回答している。

3. 両親との関係と専攻

両親に対する心理的な関係については、好意的感情、親近感、生き方を参考にした程度、および職業に対する評価の4項目で測定した。始めの3項目は、親に対する好き嫌い、心理的近さ、価値観や生活態度への共感を表わしており、親に対する同一視の程度を示していると考えられる。そこで、これら3項目の平均値を同一視得点として独立させて取り扱うこととした。表13は同一視得点と各項目の得点との相関および同一視尺度の α 係数を示したものである。父親についても母親についても、 α 係数はそれほど高くはないが、満足すべき信頼性の水準にあるといえよう。各項目の得点と同一視得点との相関については、「生き方を参考にした程度」で

表13 同一視尺度の全体得点と個別項目得点との相関係数および信頼性係数

対象 (N)	父 (680)	母 (680)
下位項目		
好意的感情	.53	.45
親近感	.45	.45
参考にした程度	.30	.26
	(.62)	(.59)

の2項目よりも少し低くなっているが、同一視尺度を構成する項目として妥当な範囲にあらう。

表14は、専攻別にみた両親との関係に関する諸項目の平均値と、一元配置の分散分析の結果を示したものである。まず父親との関係をみると、全体的にはやや好意的という程度になっている。分散分析の結果では、4項目すべてにおいて有意なF値が得られ、専攻によって父親との関係に差のあることがわかる。好意的感情と親近感によく似たパターンを示し、いずれについても保育でもっとも好意的になっている。これに次いで商業での得点が高くなっているが、好意的感情で看護との間に有意差がある以外は、他専攻との差は有意ではない。生き方を参考にした程度では、商業がもっとも高い得点を示し、次いで保育、看護、家政、専修学校の順になっているが、有意な差は商業と専修学校の間だけにみられた。同一視については、保育がもっとも高く、看護、家政、専修学校との間に有意な差がある。商業は保育に次いで高い得点となっているが、他専攻との差は有意ではない。最後に父親の職業に対する評価については、保育と商業で高

表14 専攻別による両親との関係

() 内はSD

親に対する感情	専攻	専修学校 栄養・家政 保 育 商 業 看 護					分散分析 F-値
	N	72	112	189	127	180	
父	好意的感情	3.49 (1.05)	3.37 (0.96)	3.84 (0.85)	3.51 (0.82)	3.17 (1.07)	12.26***
	親近感	3.42 (1.08)	3.40 (0.96)	3.86 (0.89)	3.55 (0.99)	3.47 (0.95)	6.08***
	生き方を参考にした程度	2.98 (1.22)	3.10 (1.04)	3.31 (0.95)	3.49 (1.04)	3.20 (1.08)	3.73**
親	同一視	3.30 (0.88)	3.29 (0.76)	3.67 (0.66)	3.52 (0.67)	3.28 (0.78)	8.99***
	職業評価	3.24 (0.78)	3.20 (0.77)	3.43 (0.82)	3.42 (0.84)	3.21 (0.74)	3.10*
母	好意的感情	3.68 (0.90)	3.78 (0.81)	4.11 (0.75)	3.80 (0.96)	3.75 (0.90)	5.97***
	親近感	4.25 (0.84)	4.19 (0.72)	4.39 (0.68)	4.41 (0.74)	4.19 (0.68)	3.30*
	生き方を参考にした程度	3.46 (1.21)	3.48 (0.87)	3.66 (0.93)	3.65 (0.95)	3.44 (1.02)	1.85
親	同一視	3.80 (0.74)	3.82 (0.54)	4.05 (0.57)	3.95 (0.65)	3.79 (0.66)	5.45***

い評価がみられるが、どの群間にも有意差はなかった。

以上のように、父親との関係は5項目で一貫した結果となっており、保育において他専攻よりも良好な関係を保っている。これに続いて商業において父親に対して好意的となっているが、他専攻との間に有意な差はない。看護、家政、専修学校の3専攻では、相対的には父親に対する好意度がもっとも低くなっている。

次に母親に対する関係は、全般的に父親に対してよりも、好意的で親近感が高く、生き方を参考にした程度も少し高くなっている。一般的に父親よりも母親のほうが子どもにとって身近であり、しかも被調査者と同性であることから、このような結果が得られたことは当然であろう。個々の項目で専攻による差をみると、まず好意的感情では有意なF値が得られ、保育で他の4群よりも好意的感情が強くなっている。親近感でもF値は有意となり、商業と保育で少し高い得点となっているが、群間の差はどれも有意にならなかった。生き方を参考にした程度についても、保育と商業で高い傾向はみられるが、有意なF値は得られなかった。これら3項目を総合した同一視では専攻の有意な効果がみられ、保育が看護および家政より高い同一視を示している。

このように、母親に対しても、父親の場合と同様に保育がもっとも良好な関係を示しており、同一視も高くなっている。しかし父親の場合とくらべて専攻による差が小

さく、全般的に父親に対してよりも好意的となっている。まとめとして、保育系学生において両親との同一視や生き方を参考にする度合がより強いことが見出されたが、このような傾向は前回の若林他(1985)の結果と符合するもので興味深い。

4. 性役割社会化経験と専攻

被調査者がこれまでに受けてきた性役割に関する親のしつけや期待、そして中学・高校での学校生活経験が専攻によってどのように異なるかをここで検討する。具体的な項目としては、①一般的、抽象的なレベルで、女の子としてのしつけを受けてきたか否か(性別しつけ)、②性格や態度の特性のレベルで、女性的(F)な特性および男性的(M)な特性がどの程度求められてきたか(期待された人間像)、③具体的な行動や態度のレベルで、女性役割および男性役割がどの程度しつけられてきたか(性役割社会化経験)、④女性に生まれてどの程度幸福か(幸福感)、⑤学業、クラブ活動、対人関係、趣味や興味などに関して、中学や高校でどのような学校生活を送ってきたか(学校生活経験)、の5つを取り上げた。

表15は、各項目についての専攻別の平均値と分散分析によるF値を示したものである。性別しつけについては、父親よりも母親から「女の子」としてしつけられているが、いずれにしてもそれ程強く「女の子」としてしつけ

表15 専攻別による性役割社会化経験 () 内はSD

性役割 社会化経験		専攻	専修学校 栄養・家政 保 育 商 業 看 護					分散分析 F-値
		N	72	112	189	127	180	
性別 しつけ	父		3.35 (0.79)	3.31 (0.69)	3.30 (0.80)	3.40 (0.77)	3.23 (0.87)	1.00
	母		3.50 (0.82)	3.59 (0.69)	3.62 (0.74)	3.68 (0.80)	3.53 (0.76)	1.17
人期待 間され 像た	M 得点		4.46 (0.91)	4.51 (0.75)	4.48 (0.68)	4.50 (0.84)	4.55 (0.81)	0.30
	F 得点		3.93 (0.74)	3.88 (0.73)	3.99 (0.63)	4.13 (0.69)	4.02 (0.70)	2.15
性役割 経験	男性役割		2.79 (0.56)	2.81 (0.44)	2.82 (0.40)	2.81 (0.44)	2.82 (0.46)	0.09
	女性役割		2.69 (0.51)	2.68 (0.38)	2.75 (0.42)	2.84 (0.44)	2.65 (0.41)	4.28**
幸 福 感			3.96 (0.85)	3.73 (0.79)	4.01 (0.84)	3.94 (0.90)	3.92 (0.83)	1.99
学 校 生 活 経 験	文化と教養		2.65 (0.85)	2.59 (0.64)	2.37 (0.61)	2.42 (0.58)	2.62 (0.69)	5.23***
	人 気 者		3.53 (0.65)	3.37 (0.52)	3.61 (0.48)	3.64 (0.55)	3.37 (0.64)	7.64***
	リーダーシップ		3.30 (0.77)	3.41 (0.68)	3.33 (0.70)	3.37 (0.76)	3.38 (0.75)	0.36
	流行追随		2.65 (0.83)	2.26 (0.57)	2.39 (0.63)	2.72 (0.69)	2.40 (0.67)	9.75***
	学 業 優 秀		3.15 (0.74)	3.28 (0.64)	2.98 (0.70)	2.62 (0.56)	3.03 (0.73)	15.31***

られたことは認知されていない。専攻による違いは、父親の場合も母親の場合もみられない。

期待された人間像については、M得点でもF得点でも専攻による効果は有意にはなっていない。そしてどの専攻でもF特性よりM特性が高くなっている。F特性は伝統的な女性特性と考えられるものから構成されているにもかかわらず、求められていたとも求められていなかったともいえないという程度にしか認知されていない。これに対し、M特性は伝統的な男性特性を多く含んでいるにもかかわらず、求められていた方向に偏っている。この結果は、一部特性語のもつ社会的望ましさによるものであろう。つまりM特性は、決断力のある、自主的、視野の広いなど、評価の高い特性から構成されていたのに対し、F特性は、線の細い、派手な、おしゃれななど、好ましさが高いとは必ずしもいえない特性を多く含んでいることが、結果に影響を与えたと考えられるのである。

次に性役割経験をみると、期待された人間像と違って、男性役割と女性役割の求められていた強さには差がなく、

どちらについても「少し求められていた」程度である。専攻による差異は、男性役割ではみられなかったが、女性役割ではみられた。商業でもっとも女性役割しつけが強く、保育がこれに続くが、有意な差は商業と看護の間だけで得られた。

幸福感に関しては専攻による差異はなく、全体として「まあまあ幸福」という程度になっている。

最後に学校生活経験についての結果をみると、一般的に人気者とリーダーシップでの得点が高く、文化と教養および流行追随での得点が低くなっている。良好な友人関係を持ち、クラスや学校の行事、クラブ活動に積極的に参加し、中心的役割を果たすという経験は比較的多くなされたが、社会問題や文学・芸術にはあまり関心がなく、またおしゃれや流行にもそれほど気をつかわない、という生活が平均的なものであったようである。専攻による差はリーダーシップではみられなかったが、他の4項目ではF値が有意となった。文化と教養については、保育と商業で低くなっているが、有意差は保育と専修学

校および看護の間でみられた。人気者では逆に商業と保育が高得点を示し、家政と看護が低くなっている。流行追随については商業がもっとも高く、家政、保育、看護より有意に高い。専修学校がこれに次ぐが、家政との間だけに有意差がある。最後に学業優秀に関しては、商業が最低で、他の4群との間に有意差がある。また保育も、もっとも高い家政より有意に低い。

このように、専攻による学校生活経験の違いがかなりみられたので、各専攻の学校生活経験のパターンの特徴をより明確にするため、図2を作成した。文化・教養と学業優秀との相関、人気者と流行追随との相関が高いので、これらを隣同士に並べかえてある。これに基づいて各専攻の特徴をみると、商業は、文化と教養や学業優秀という知的側面については低い、人気や流行追随については高いという、「軽く楽しい学校生活」のパターンを示す。これと逆のパターンを示しているのが家政と看護であり、知的関心や学業は高いが、人気や流行追随は低いという「知的で地味な学校生活」のパターンとなっている。専修学校については、知的側面が高く、人気や

流行追随も高くなっており、「知的、社交的でファッションブルな学校生活」のパターンとなっている。保育はこれらとはまた異なったパターンを示し、知的関心や学業は低い方であり、人気者では得点が高いという点では商業と同じであるが、商業が流行追随で高得点を示しているのに対し、保育ではこれが低くなっている。

以上の性役割社会化経験の結果をまとめると、次のようになる。性役割に関する親のしつけや期待については専攻による違いがほとんどみられず、女性役割経験でわずかにみられただけである。そして全般的に親からの女性役割の期待やしつけは強く認知されており、男性役割もそれと同程度、あるいはそれ以上に求められていたと認知されている。これはおそらく、伝統的な男性役割の社会的望ましさのためであろうと解釈された。前述のように、この結果は親の実際の期待やしつけをそのまま表わしているものではないが、被調査者がそれほど強い女性役割期待やしつけを感じてこなかったという結果は興味深い。中学・高校での学校生活の様子には専攻によるかなりの差異がみられ、専攻によってそれぞれ特徴的な学校生活パターンがみられた。

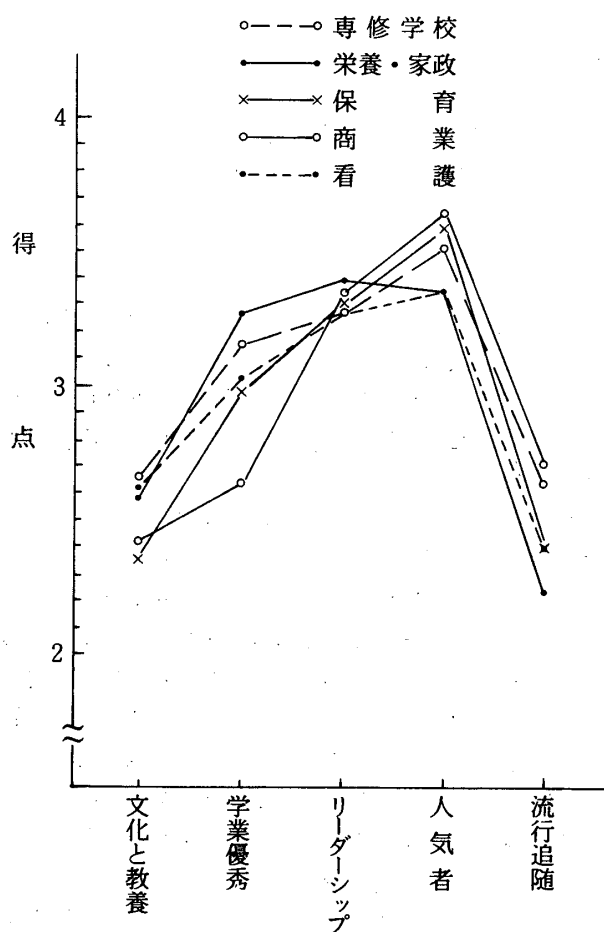


図2 専攻による学校生活経験のパターン

5. 同一視および性役割社会化経験の相互関連

両親への同一視が性役割社会化経験とどのような関連をもっているのかをみるために、両者の積率相関係数を求めた結果が表16である。どの値もそれほど高くはないが、有意となったものがいくつかみられ、また父親に対する同一視よりも母親に対する同一視の方が、性役割社会化経験との関係が強くなっている。この結果は、父親よりも母親がしつけの中心的役割を果たしていること、および母親が被調査者と同性であることから理解できよう。

性役割社会化経験の中で、同一視との関連が強いのは性役割経験であり、母親への同一視が高いほど女性役割だけでなく男性役割しつけも強く認知される傾向があり、また父親への同一視についても、これが高いほど男性役割しつけも女性役割しつけも強く認知される傾向がみられた。すなわち、同一視が高いほど、同一視の対象と合致した性役割しつけだけでなく、それと逆の性役割しつけも強く認知されているのである。M特性およびF特性の期待は母親への同一視との間で正の相関を示しており、母親への同一視が強いほどこれらの期待も高いという関係がある。しかし同一視と性別しつけの間には何の関係もなかった。学校生活経験に関しては、人気者と父母への同一視との相関が正で有意となり、同一視が高いほど友人関係が良好で人気が高いという傾向がみられる。また母親への同一視が強いと学業優秀であるという関係も

表16 両親への同一視と性役割社会化経験との相関

性役割社会化経験 同一視	性別しつけ		期待された人間像		性役割経験		幸福感		学校生活経験			
	父	母	M得点	F得点	男性役割	女性役割	幸福感	文化と教養	人気者	リーダーシップ	流行追随	学業優秀
父親への同一視	.005	.012	.059	.066	.128 ^{***}	.153 ^{***}	.118 ^{**}	.025	.131 ^{***}	.022	.045	.029
母親への同一視	.020	.026	.110 ^{**}	.140 ^{***}	.159 ^{***}	.218 ^{***}	.194 ^{***}	.079 [*]	.130 ^{***}	.059	.052	.150 ^{***}

** p < .01, *** p < .001

表17 性役割社会化経験の相互の相関

性別しつけ	期待された人間像		性役割経験		幸福感		学校生活経験			
	父	母	男性役割	女性役割	幸福感	文化と教養	人気者	リーダーシップ	流行追随	学業優秀
しつけ別	.479 ^{***}	-.009	.017	.227 ^{***}	.134 ^{***}	-.068	.024	-.036	.062	.004
人さ期間れ像た待		-.046	.049	.260 ^{***}	.090 [*]	-.058	-.006	-.003	.068	-.047
男性役割			.326 ^{***}	.177 ^{***}	-.018	.098 [*]	.048	.144 ^{***}	.077 [*]	.066
女性役割			.138 ^{***}	.367 ^{***}	.141 ^{***}	-.004	.056	.084 [*]	.212 ^{***}	-.082 [*]
幸福感				.373 ^{***}	.094 [*]	.204 ^{***}	.211 ^{***}	.242 ^{***}	.099 ^{**}	.100 ^{**}
					.169 ^{***}	.058	.176 ^{***}	.112 ^{**}	.286 ^{***}	-.045
						-.103 ^{**}	.116 ^{**}	.013	.087 [*]	.053

* p < .05, ** p < .01, *** p < .001

みられる。

次に性役割社会化経験の相互の関係を相関係数で示したものが表17である。父親からの性別しつけと母親からのそれとの相関は.48と高く、両親の間の高い一致を示している。ただし被調査者に認知されたしつけであることから、実際以上に一致度が高くなったかもしれない。性別しつけ、F特性の期待、および女性役割経験はいずれも伝統的な女性特性や態度についての親のしつけや期待を反映しているが、これらの間の相関はすべて正の高い値となっている。このことから、これら3領域は、女の子らしさのしつけ、女らしい性格特性の期待、女性的行動や態度について、というように女性役割の多少異なった側面に焦点を当てているが、そこにはやはりかなり高い一貫性が認知されているといえよう。同様に、M特性の期待と男性役割経験との間にも高い関連性がある。

性別しつけとM特性期待および男性役割経験との間の関係はみられない。しかしM特性期待とF特性期待および女性役割経験との間、そして男性役割経験とF特性期待および女性役割経験との間には、男性-女性という次元でみれば相互に反対の方向にあるにもかかわらず、正の有意な相関が得られた。これは、ここで扱われている特性や行動の大部分が社会的に望ましいものであることから、親の期待が高かったり、しつけがしっかりしていれば、男性役割も女性役割も共に強く求められていた、と認知される傾向にあるためであろう。

女性としての幸福感は、性別しつけ、F特性期待、および女性役割経験と正の有意な相関を示し、女性役割のしつけや期待が強いほど女性としての幸福感も強い傾向がある。学校生活経験との間には、人気者および流行追随で正の、文化と教養で負の相関がみられる。

性役割しつけや期待と学校生活経験との関係については、男性役割経験と文化・教養、人気者、およびリーダーシップとの間に有意な正の相関がある。またM特性期待とリーダーシップとの相関も正で有意となっている。これに対し女性役割経験は流行追随や人気者と正の有意な関係を持ち、リーダーシップとの相関も有意ではあるがあまり高くはない。F特性期待も流行追随との間に正の有意な相関を示している。性別しつけと学校生活経験との関係はみられなかった。

文化と教養は男性役割しつけと正の相関を示していたが、文化と教養が社会問題や政治への関心を含んでおり、これは伝統的に男性に強くみられる関心とされていることから、両者の相関は理解できよう。これに対し、おしゃれや流行への関心は一般的に女性特性とされており、流行追随と女性役割しつけとの高い関係も肯ける。人気者とリーダーシップは女性役割しつけとも男性役割しつけ

とも正の関係をもっていたが、リーダーシップについては男性役割しつけとの関係のほうが強かった。

性別しつけよりも期待された人間像で、またそれよりも性役割経験において、学校生活経験との関連性が高くなったのはなぜだろうか。しつけには、漠然とした親の期待よりも具体的な行動や態度のレベルでの親の教養態度のほうが、子どものパーソナリティに大きな影響を与えるためであると考えられる。また性役割経験の項目内容(表2参照)からみて、「子どもの頃」といっても、もし中学生のような比較的年齢の高い頃が回想されたとしたら、学校生活経験で尋ねている中学・高校の時代との時間的な近接性が生じ、両者の間で高い関連性が生み出されてくることも考えられる。

6. 数量化理論第Ⅲ類による性役割社会化経験のパターン分類

性役割社会化経験の要因として、本研究では、父親および母親からの性別しつけ、期待された人間像(M特性、F特性)、性役割経験(男性役割、女性役割)、女性としての幸福感、および学校生活経験(文化と教養、人気者、リーダーシップ、流行追随、学業優秀)の12要因を取り上げている。これらに、これらと関連の深い父親および母親に対する同一視を加えた14要因について、どのような次元上でどのように分類されるかを検討するため、数量化理論第Ⅲ類による分析を行なった。ここでは14要因各々について、平均値を中心に高得点と低得点の2カテゴリーに分け、したがって14要因28カテゴリーについて、数量化理論第Ⅲ類を適用した。

この結果、第Ⅰ次元と第Ⅱ次元が有力と判断された。各次元についての各々のカテゴリーのウェイトは、表18と表19に示した通りである。第Ⅰ次元については、プラス方向のウェイトをもつカテゴリーはすべて各要因の高得点カテゴリーであり、中でも高いウェイトをもつものは、M特性期待もF特性期待も高い、男性役割経験も女性役割経験も高い、女の子を意識したしつけが強い、両親に対する同一視が強いといったものである。反対にマイナス方向のウェイトの大きいカテゴリーは、女性としての幸福感が低い、男性役割経験も女性役割経験も低い、F特性期待もM特性期待も低い、母親に対する同一視が弱い、などである。したがって第Ⅰ次元は、「両性型(MF型)しつけ-未分化型(mf型)しつけ」を表わすと考えられる。

第Ⅱ次元については、プラス方向のウェイトの大きいカテゴリーには、女の子を意識しない両親のしつけ、高い男性役割経験、父親に対する高い同一視、文化と教養およびリーダーシップが高いことなどが含まれる。これ

表18 数量化理論第Ⅲ類に基づく性役割社会化経験のパターン分類
(第Ⅰ次元)

第Ⅰ次元：両性型(MF型)しつけ - 未分化型(mf型)しつけ ($\rho=.40$) (プラス方向 - マイナス方向)			
変数名	カテゴリNoと名称(度数)	カテゴリウエイト	
プラス方向	性役割経験(女)	2. 女性役割 - 高 (316)	1.76
	期待された人間像(F)	2. F 得点 - 高 (336)	1.39
	性役割経験(男)	2. 男性役割 - 高 (314)	1.32
	父のしつけ	1. 「女の子」を意識した (253)	1.06
	期待された人間像(M)	2. M 得点 - 高 (341)	1.01
	学校生活経験(2)	2. 人気者 - 高 (348)	0.99
	母のしつけ	1. 「女の子」を意識した (374)	0.96
	学校生活経験(4)	2. 流行追随 - 高 (338)	0.95
	母同一視得点	2. 同一視 - 高 (382)	0.95
	父同一視得点	2. 同一視 - 高 (324)	0.81
	学校生活経験(3)	2. リーダーシップ - 高 (343)	0.75
	女性としての幸福感	2. 高 (532)	0.46
	学校生活経験(1)	2. 文化と教養 - 高 (329)	0.21
	学校生活経験(5)	2. 学業優秀 - 高 (378)	0.18
	マイナス方向	女性としての幸福感	1. 低 (146)
性役割経験(女)		1. 女性役割 - 低 (364)	-1.53
期待された人間像(F)		1. F 得点 - 低 (344)	-1.36
母同一視得点		1. 同一視 - 低 (296)	-1.21
母のしつけ		2. 「女の子」を意識しない (306)	-1.17
性役割経験(男)		1. 男性役割 - 低 (366)	-1.14
学校生活経験(2)		1. 人気者 - 低 (332)	-1.03
期待された人間像(M)		1. M 得点 - 低 (339)	-1.01
学校生活経験(4)		1. 流行追随 - 低 (342)	-0.94
学校生活経験(3)		1. リーダーシップ - 低 (337)	-0.77
父同一視得点		1. 同一視 - 低 (355)	-0.75
父のしつけ		2. 「女の子」を意識しない (427)	-0.63
学校生活経験(5)		1. 学業優秀 - 低 (302)	-0.22
学校生活経験(1)		1. 文化と教養 - 低 (351)	-0.20

に対し、マイナス方向にウエイトの大きいものは、女の子を意識した両親のしつけ、母親に対する低い同一視、弱い男性役割経験、父親に対する低い同一視、リーダーシップや文化と教養が低いことなどとなっている。このような内容から、第Ⅱ次元は「男性役割(M型)しつけ - 女性役割(F型)しつけ」と解釈できよう。

7. 専攻および家庭環境と性役割社会化経験との関係

数量化理論第Ⅲ類で得られた第Ⅰ次元と第Ⅱ次元につ

いて、専攻および父母の学歴、父親の職業、家庭の社会経済的水準という家庭環境の各カテゴリの得点を算出し、両次元で構成される座標上に各カテゴリの位置を示したものが図3である。この図でもっとも特徴的なのは、家庭の社会経済的水準の3カテゴリが第Ⅰ次元に関して強く弁別されていることである。すなわち、MF-mf次元において、「中の上」以上の家庭水準はMFの方向に大きく偏り、「中の中」の水準は中心付近に位置し、「中の下」以下の水準はmf方向に偏っているのである。また「中の上」以上の水準は第Ⅱ次元のM-F次元にお

女子短大生における性役割社会化と職業興味

表19 数量化理論第Ⅲ類に基づく性役割社会化経験のパターン分類
(第Ⅱ次元)

第Ⅱ次元：男性役割（M型）しつけ — 女性役割（F型）しつけ ($\rho=.33$) (プラス方向 — マイナス方向)			
変数名	カテゴリNoと名称 (度数)	カテゴリウエイト	
プ ラ ス 方 向	母のしつけ	2. 「女の子」を意識しない (306)	1.99
	父のしつけ	2. 「女の子」を意識しない (427)	1.43
	性役割経験(男)	2. 男性役割 — 高 (314)	1.20
	父同一視得点	2. 同一視 — 高 (325)	1.12
	学校生活経験(1)	2. 文化と教養 — 高 (329)	1.04
	学校生活経験(3)	2. リーダーシップ — 高 (343)	0.98
	女性としての幸福感	1. 低 (146)	0.94
	母同一視得点	2. 同一視 — 高 (382)	0.84
	期待された人間像(M)	2. M得点 — 高 (341)	0.66
	学校生活経験(2)	2. 人気者 — 高 (348)	0.59
	学校生活経験(5)	2. 学業優秀 — 高 (378)	0.58
	期待された人間像(F)	1. F得点 — 低 (344)	0.53
	学校生活経験(4)	1. 流行追随 — 低 (342)	0.38
	性役割経験(女)	1. 女性役割 — 低 (364)	0.35
マ イ ナ ス 方 向	父のしつけ	1. 「女の子」を意識した (253)	-2.41
	母のしつけ	1. 「女の子」を意識した (374)	-1.62
	母同一視得点	1. 同一視 — 低 (296)	-1.07
	性役割経験(男)	1. 男性役割 — 低 (366)	-1.03
	父同一視得点	1. 同一視 — 低 (355)	-1.03
	学校生活経験(3)	1. リーダーシップ — 低 (337)	-1.00
	学校生活経験(1)	1. 文化と教養 — 低 (351)	-0.98
	学校生活経験(5)	1. 学業優秀 — 低 (302)	-0.73
	期待された人間像(M)	1. M得点 — 低 (339)	-0.66
	学校生活経験(2)	1. 人気者 — 低 (332)	-0.62
	期待された人間像(F)	2. F得点 — 高 (336)	-0.54
	性役割経験(女)	2. 女性役割 — 高 (316)	-0.40
学校生活経験(4)	2. 流行追随 — 高 (338)	-0.39	
女性としての幸福感	2. 高 (532)	-0.27	

いてもM方向にずれている。母親の学歴については、短大・大卒という高学歴カテゴリーが第Ⅰ次元のMF方向に大きく偏っている。しかし義務教育終了という低学歴カテゴリーはmf方向に偏ってはいるものの、それほど大きな偏りではない。

専攻に関しては、商業が他専攻とは離れた位置を占め第Ⅰ次元についてはMF方向、第Ⅱ次元についてはF方向に位置している。他の4専攻はあまり大きな偏りを示してはいないが、第Ⅰ次元について、保育はプラス方向、家政、看護、専修学校はマイナス方向に位置している。

前述の、専攻による親との関係や性役割社会化経験の差異の検討において見出された結果によれば、商業は、両親に対する同一視が強い、女性役割経験やF得点が高い、学校生活経験では人気と流行追随が高く、学業優秀と文化・教養は低いという特徴を示していた。第Ⅰ次元×第Ⅱ次元での商業の位置は、これらの特徴と斉合するものである。

図3にみられるように、家庭の社会経済的水準によって第Ⅰ次元上における位置がかなり異なることが明らかにされたので、家庭の社会経済的水準によって同一視お

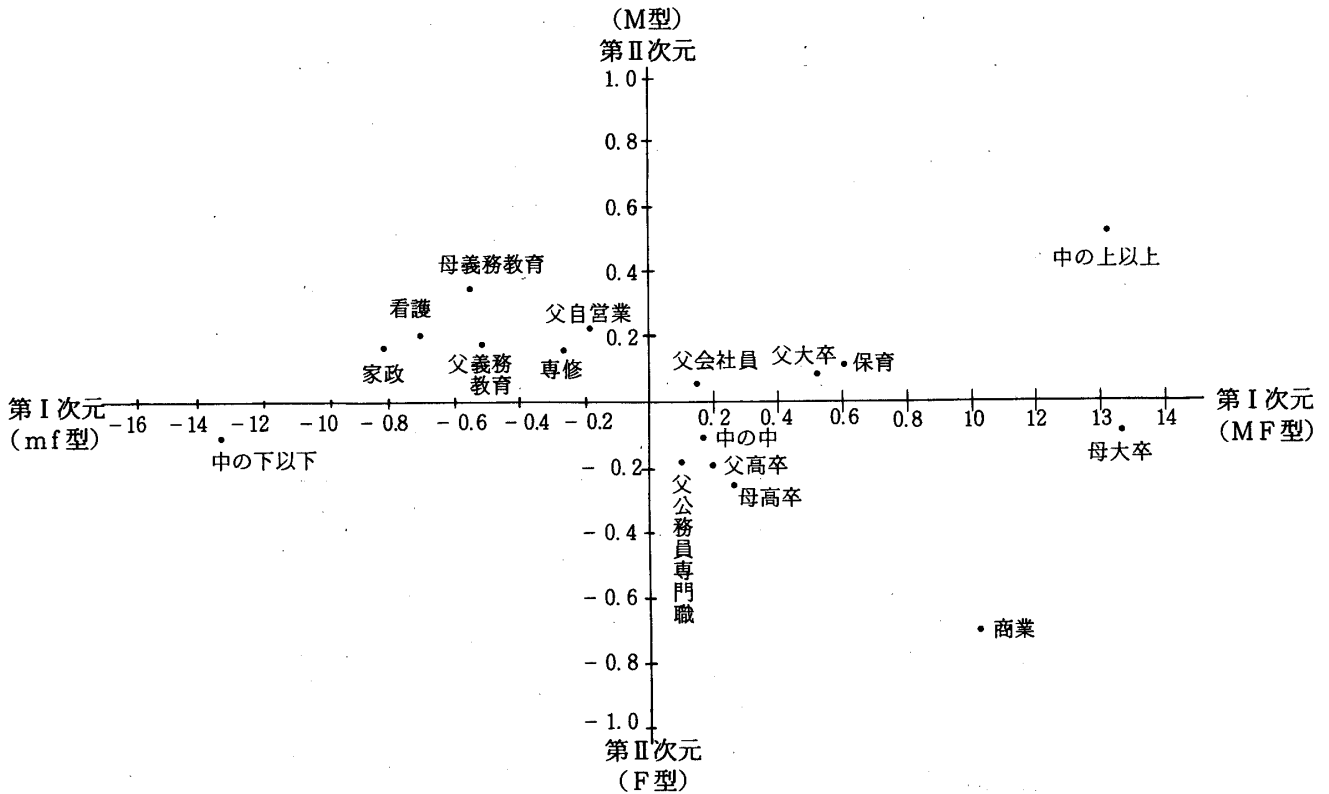


図3 性役割社会化要因の第I次元×第II次元での専攻および家庭環境要因の位置づけ

および性役割社会化経験がどのような違いを示すかを直接検討したものが、表20である。これによると、まず両親への同一視は、「中の下」以下の低い水準で、「中の中」と「中の上」以上よりも弱くなっている。性別しつけ、期待された人間像では家庭水準の効果は有意になっていない。しかし女性役割経験においては、家庭の社会経済的水準が低いと得点が低いという関係がみられる。また学校生活経験については、人気者、リーダーシップ、流行追随の3項目では、家庭の社会経済的水準が低いとこれらの得点が低くなっているが、文化・教養と学業優秀では「中の中」の水準で低い傾向がみられる。

このようにいくつかの項目で、家庭の社会経済的水準による高>中>低という一貫した関係がみられ、家庭の社会経済的水準が高いほど、両親に対する同一視が強く、女性役割しつけが強く、中学・高校時代には対人関係が良好でリーダーシップをとり、流行やおしゃれに気をつかうという傾向が強くなっていた。またリーダーシップを除いては、「中の上」以上の水準と「中の中」の水準との間には有意な差がなく、「中の下」以下の水準の場合にこれらの傾向が弱くなるのである。

8. まとめと討論

結果Ⅱでの分析の主目的である専攻による性役割社会

化経験の差異に関しては、いくつかの比較的一貫した結果が得られた。すなわち、保育および商業が家政、看護、専修学校よりも、父親および母親に対して好意的感情をもち、同一視が高く、また親から女性役割しつけを受けてきた程度が強いと認知しているのである。また中学・高校での学校生活においても、専攻によってそれぞれ特徴的な生活振りがみられた。たとえば、商業は知的活動や関心は低いが対人関係は良好で流行に敏感であるが、家政と看護はこれと逆に、知的活動は高く、対人関係や流行に関しては地味であった。

しかし本調査では各専攻に含まれる短大の数が少なく、専修学校のように1校だけの場合もあった。また短大の学力レベルや学生の家庭の社会経済的水準など、性役割社会化や学校生活に関連が深いと考えられる要因をコントロールしていない。したがって本研究において得られた専攻による差異が、専攻それ自体から生じているものなのか、あるいは他の要因が媒介しているものなのか、ここだけで結論づけることはできない。

また性役割しつけや期待に関して、専攻による差異は女性役割経験でみられただけであったが、これは本研究で対象にした専攻が保育、看護、家政に代表されるように、伝統的に女性に適したものとされているためであろう。女子短大生の職業選択過程に焦点を当てて一連の研

表20 家庭の状況による両親との関係および性役割社会化経験 ()内はSD

下位尺度		家庭の状況	中の上 以 上 (114)	中の中 (403)	中の下 以 下 (163)	分散分析 F-値
同一視得点	父		3.64 (0.72)	3.48 (0.71)	3.18 (0.80)	15.495***
	母		4.08 (0.59)	3.92 (0.60)	3.73 (0.70)	10.995***
性別しつけ	父		2.69 (0.75)	2.68 (0.80)	2.73 (0.83)	0.295
	母		2.37 (0.77)	2.37 (0.76)	2.54 (0.75)	2.976
幸 福 感			3.95 (0.92)	3.94 (0.78)	3.85 (0.93)	0.830
期待された 人間像	M 得 点		4.46 (0.93)	4.51 (0.73)	4.52 (0.77)	0.205
	F 得 点		4.04 (0.77)	4.02 (0.66)	3.93 (0.71)	1.337
性役割経験	男 性 役 割		2.86 (0.44)	2.81 (0.44)	2.79 (0.47)	0.979
	女 性 役 割		2.81 (0.48)	2.74 (0.41)	2.62 (0.43)	7.563***
中学・高校 における 学校生活 経 験	文化と教養		2.57 (0.67)	2.45 (0.66)	2.62 (0.68)	4.044*
	人 気 者		3.61 (0.67)	3.53 (0.55)	3.37 (0.54)	7.252***
	リーダーシップ		3.55 (0.71)	3.33 (0.73)	3.30 (0.72)	4.698**
	流行追随		2.65 (0.74)	2.48 (0.66)	2.27 (0.66)	10.880***
	学業優秀		3.09 (0.70)	2.93 (0.70)	3.08 (0.74)	3.989*

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

究を進めてきているので、必然的に女性向きとされている専攻になるのであるが、必ずしも女性向きとされていない専攻や、むしろ男性に適しているとされてきた専攻を含めれば、もっと大きな専攻による差異が生じるであろう。

若林他(1983)において、保育系、看護系、人文系の間には職業意識や職業自己概念の差があることが明らかにされたが、専攻によって親への同一視、性役割しつけ、学校生活経験に違いがあるという本研究の結果を考え合わせると、性役割社会化経験が性役割観の形成に大きな影響を及ぼし、それが専攻や職業選択に影響を与えることが十分考えられる。今後はどのような性役割経験がどのようなプロセスで進路・職業選択に影響を及ぼしていくのかを検討することが重要である。

数量化理論第Ⅲ類によって性役割社会化経験の諸カテゴリーを分類した結果によれば、MF-mfと解釈される次元とM-Fを示していると判断できる次元の2つが得られた。Spenceら(Spence, Helmreich, & Stapp, 1975; Spence & Helmreich, 1978)や鹿内他(1982)において、M-Fという1次元で性役割を把えることは不十分であり、男性(M)特性と女性(F)特性をそれぞれもつ程度を組み合わせ、MF型、M型、F型、mf型の4つの性役割タイプを考える必要のあることが明らかにされたが、本研究の結果はこれと斉合するものである。ここでは親の性役割しつけについての認知や学校生活経験を扱っており、鹿内他(1982)で問題にしているM特性およびF特性についての自己評定とは異なった側面を把えているにもかかわらず、MF-mfという両性

性に関する次元も得られたことは興味深い。

最後に、性別しつけ、期待された人間像、性役割経験という3種の性役割社会化経験のうち、専攻による差がみられたのも、また親に対する同一視や学校生活経験との関連がもっとも強かった側面は、性役割経験であったことについて考えてみよう。柏木他(1973)においては、親の性役割観と実際のしつけとは必ずしも一貫しておらず、性役割観は男女平等主義的であってもしつけは伝統的であるというケース、あるいはこの逆のケースも多く見出されている。本研究の性別しつけや期待された人間像は、漠然とした親の態度や抽象的な期待を測っているので親の性役割観を大きく反映しており、他方性役割経験のほうは行動レベルの具体的なしつけを把握できると考えることができる。したがって両者の間にはある程度の一貫性がみられても、それが子どもに与える影響には差異が生じたのかもしれない。すなわち、具体的な行動レベルでの両親からの性役割しつけが女子の進路・職業選択により強い影響を与えるものであるといえる。

V. 結果Ⅲ：専攻別にみた女子短大生の職業意識と自己概念

ここでの分析の目的は、前節の性役割社会化の検討に続いて、女子短大生が現時点(青年後期)でもっている職業興味や職業志向性、さらには自己概念について、専攻別に比較し検討してみることである。女子の場合、青年中期までのさまざまな経験、とくに性役割社会化経験

にもとづいて職業興味や職業志向性が形成されるとともに、大学のどの専攻を選択するかということも規定されてくることは、すでに見た通りである。これらの結果を受け本節では、つぎに、職業興味や職業志向性、そして自己概念について専攻間での比較を行う。続いて、青年中期までに経験したしつけや諸経験が、職業興味のちがいとどう関連するか、さらに青年後期の職業志向性や自己概念が職業興味のちがいとどのように関連しているかを、相関分析と回帰分析によって検討する。

1. 専攻別にみた職業意識と自己概念

(1) 専攻別にみた職業興味

まず、女子短大生の職業興味について5つの専攻間で比較してみることにする。表21は、8つの職業タイプに対する職業興味得点の平均値と標準偏差、および5つの専攻間での分散分析の結果を示したものである。また、図4には、5つの専攻間での各職業興味尺度の平均値を図示した。図から明らかなように、8つの職業タイプの中では、販売・現業職の平均値が低く、女子短大生の間では販売・現業職に対する人気が最低であることがわかる。

つぎに、分散分析の結果をみると、表21から明らかなように、事務的専門職を除く7つのタイプで、有意な専攻間の差が得られている。具体的に専攻別の平均値を比較してみると、まず服飾・商業美術職に対する興味では、商業系の平均値が保育系、看護系のそれよりも有

表21 専攻別にみた職業興味の低位尺度平均値と標準偏差

専 攻		専修学校	栄養・家政	保 育	商 業	看 護	分散分析 F-値
		(72)	(112)	(189)	(127)	(180)	
職 業 興 味	事務的専門職	2.18 (0.69)	2.03 (0.64)	2.03 (0.56)	2.15 (0.56)	2.09 (0.64)	1.508
	服飾・商業美術職	1.87 (0.58)	2.08 (0.54)	1.78 (0.49)	2.07 (0.55)	1.66 (0.46)	18.609**
	販売・現業職	1.51 (0.53)	1.42 (0.40)	1.44 (0.43)	1.51 (0.42)	1.37 (0.43)	2.527*
	医療・社会福祉職	1.96 (0.66)	2.10 (0.62)	2.12 (0.59)	2.06 (0.59)	2.69 (0.53)	37.631**
	マスコミ職	2.45 (0.89)	2.30 (0.77)	2.09 (0.68)	2.43 (0.84)	2.13 (0.74)	6.010**
	窓口サービス職	2.41 (0.69)	2.21 (0.64)	2.22 (0.65)	2.64 (0.56)	1.96 (0.60)	23.355**
	教 育 職	2.18 (0.84)	2.46 (0.77)	3.22 (0.57)	2.17 (0.74)	2.75 (0.71)	56.814**
	語学専門職	3.00 (0.72)	2.35 (0.80)	2.19 (0.78)	2.62 (0.76)	2.30 (0.85)	16.524**

* $p < .05$, ** $p < .01$

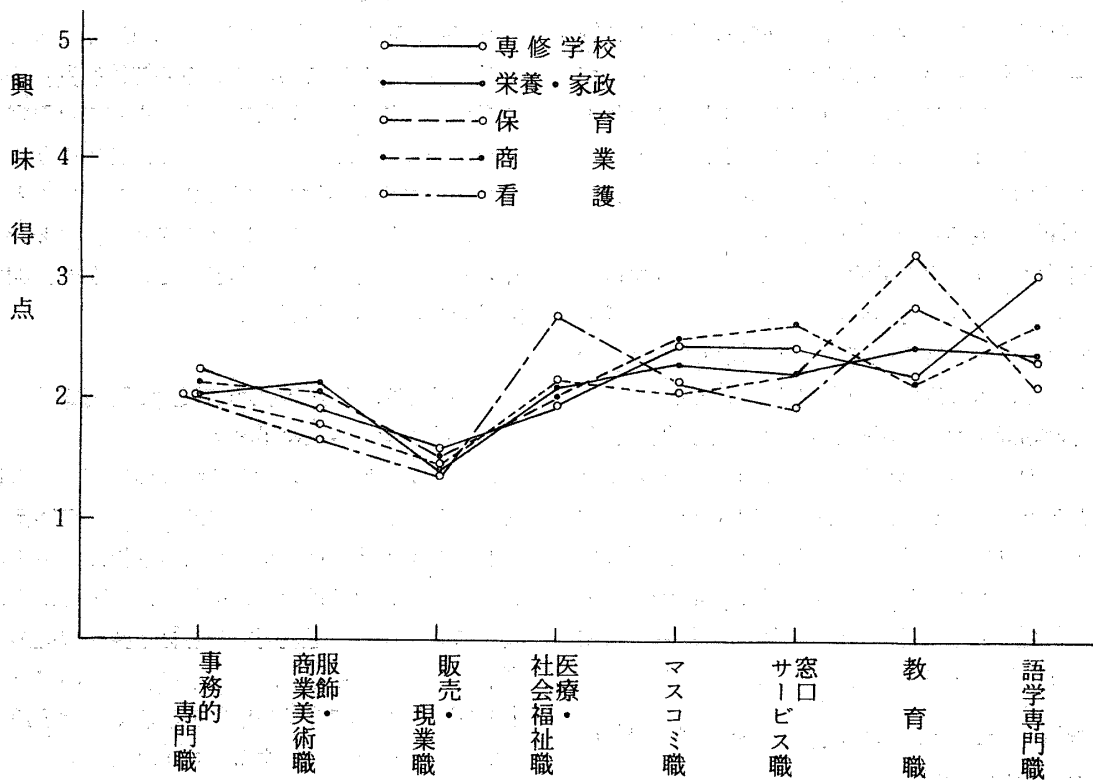


図4 専攻別にみた職業興味尺度の平均値

意に高く、また栄養・家政系の平均値が保育系、看護系のそれよりも高いことが見出された。販売・現業職に対する興味については、5つの専攻の間で平均値に有意なちがいはみられなかった。医療・社会福祉職に対する興味では、看護系の平均値が他の4つの系の平均値よりもはるかに高く、看護系でこの職業タイプについての興味が強いことがわかる。マスコミ職に対する興味では、専修学校系の平均値が保育系よりも高く、また商業系の平均値が保育系、看護系の平均値よりも高くなっている。これらのことからマスコミ職については専修学校系、商業系で興味が強いといえる。

窓口サービス職に対する興味では、商業系が最も高く、看護系が最も低くなっている。そして商業系の平均値は栄養・家政系、保育系、看護系のそれぞれの平均値よりも高い。さらに、看護系の平均値は専修学校系、栄養・家政系、保育系のどの平均値よりも低いという結果も得た。教育職に対する興味では、保育系が最も高く、専修学校系や商業系が低い。各グループの平均値を比較してみると、保育系の平均値は他の4つのグループの平均値よりも高く、看護系の平均値は、栄養・家政系、専修学校系、商業系の3グループよりも高く、さらに栄養・家政系の平均値は商業系のそれよりも高いという結果となっ

た。語学専門職に対する興味では、専修学校系が最も高く、保育系が最も低い。そして、専修学校系の平均値は他の4つのグループの平均値よりも高い。また、商業系の平均値は保育系、看護系の平均値よりも高い。

以上の結果から明らかのように、専修学校系ではマスコミ職および語学専門職に対し、保育系では教育職、商業系では窓口サービス職、そして看護系では医療・社会福祉職に対し、強い職業興味を示されている。これらの結果は図4からも明らかである。なお栄養・家政系では、特定の職業タイプとの結びつきは見出されなかった。

(2) 専攻別にみた自己概念と職業志向

表22は、大学生時点でのM得点とF得点、ならびに職業志向性の3つの下位尺度について、平均値と標準偏差を専攻別に示したものである。また、5専攻間での分散分析の結果も示されている。まず、M得点とF得点の平均値をみると、いずれの専攻においてもM得点の方が高い値を示している。分散分析の結果、M得点については専攻間で有意な結果が得られなかったが、F得点については、5%水準で有意な結果となった。ただし、特定の専攻グループ間での平均値のちがいはみられなかった。

つぎに、職業志向性について専攻別に比較した結果を表22と図5にしたがって見てみよう。職業志向の下位尺

表22 専攻別にみた大学生時点での自己概念と職業志向性尺度の平均値と標準偏差

専攻		専修学校 (72)	栄養・家政 (112)	保 育 (189)	商 業 (127)	看 護 (180)	分散分析 F - 値
の大学生 M・F 時点	M 得点	4.12 (1.08)	4.00 (0.90)	3.99 (0.71)	4.19 (0.91)	3.98 (0.81)	1.692
	F 得点	3.68 (0.82)	3.70 (0.69)	3.85 (0.63)	3.96 (0.70)	3.80 (0.72)	2.900*
職業志向	職務挑戦	3.56 (0.57)	3.38 (0.48)	3.35 (0.50)	3.23 (0.52)	3.48 (0.48)	7.046***
	人間関係	4.11 (0.58)	3.96 (0.54)	4.16 (0.51)	4.04 (0.45)	4.11 (0.53)	3.106*
	労働条件	3.91 (0.55)	3.68 (0.53)	3.72 (0.53)	3.86 (0.50)	3.83 (0.52)	3.750**

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

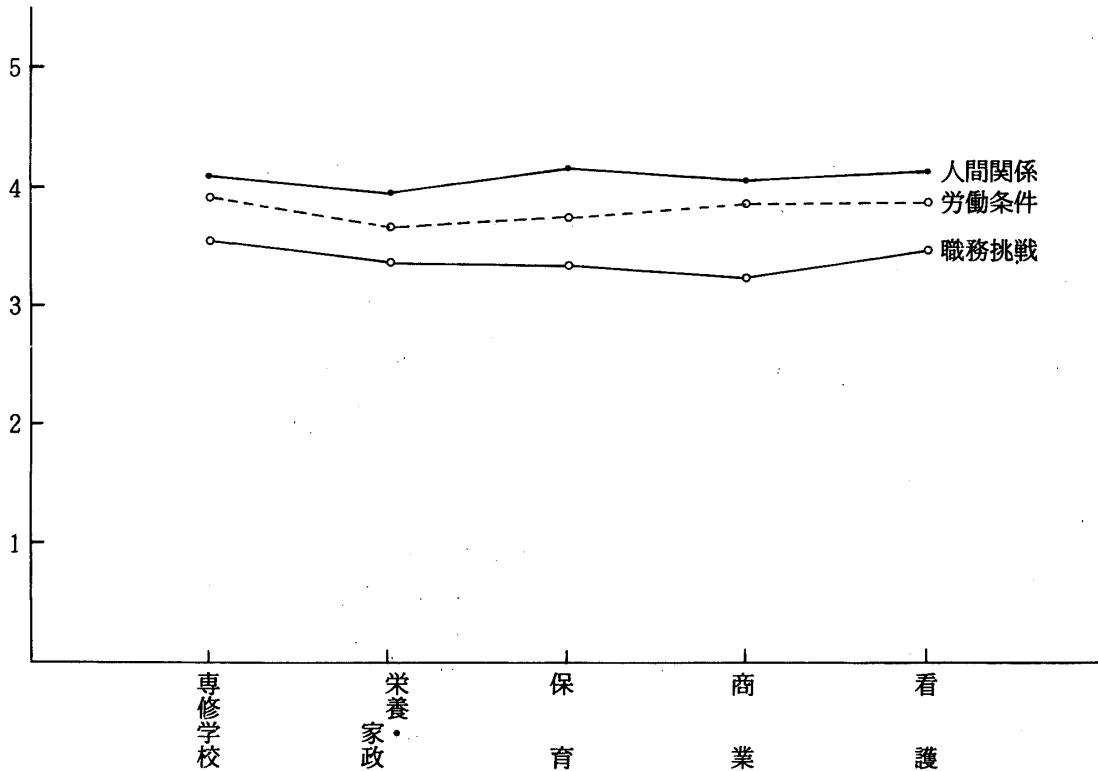


図5 専攻別にみた大学生時点での職業志向性尺度の平均値

度について、専攻間で一元配置の分散分析を行ったところ、3つのすべての下位尺度について有意な結果が得られた。まず、職務挑戦志向性尺度では専修学校系の平均値が最も高く、商業系のそれが最も低い。平均値をグループ間で比較したところ、専修学校系および看護系の平均値が商業系の平均値よりも高いことが明らかにされた。他のグループの間では平均値の有意なちがいはみられなかった。人間関係志向性尺度、労働条件志向性尺度については、分散分析の結果は有意であったが、グループに

よる平均値のちがいはみられなかった。なお、図5から明らかなように、いずれのグループにおいても人間関係志向性尺度の平均値が最も高く、職務挑戦志向性尺度の値が最も低い。

(3) 専攻別にみた学生生活満足度

さいごに、学生生活の諸側面に関わる満足度を6つの下位尺度について検討する。表23には下位尺度の平均値と標準偏差ならびに分散分析の結果を示した。また図6には下位尺度の平均値を専攻別に示した。表23に示した

女子短大生における性役割社会化と職業興味

表23 専攻別にみた学生生活満足度の平均値と標準偏差

満足項目	専攻	専修学校 (72)	栄養・家政 (112)	保育 (189)	商業 (127)	看護 (180)	分散分析 F-値
友人関係		5.50 (1.05)	5.34 (1.12)	5.59 (1.00)	5.56 (1.13)	5.27 (1.12)	2.770*
学業成績		3.69 (1.25)	4.13 (1.08)	3.92 (1.03)	3.35 (1.32)	3.96 (1.16)	8.456***
授業内容		3.79 (1.16)	3.91 (0.88)	4.15 (0.92)	3.81 (1.10)	3.91 (0.88)	3.373**
大学の雰囲気		3.44 (1.41)	3.70 (1.39)	4.37 (1.15)	3.36 (1.26)	3.87 (1.29)	14.464***
課外活動		3.68 (1.53)	4.12 (1.52)	4.16 (1.17)	3.28 (1.40)	3.95 (1.39)	9.380***
学生生活全体		4.36 (1.21)	4.19 (1.27)	4.57 (1.00)	4.26 (1.26)	4.32 (1.12)	2.508*

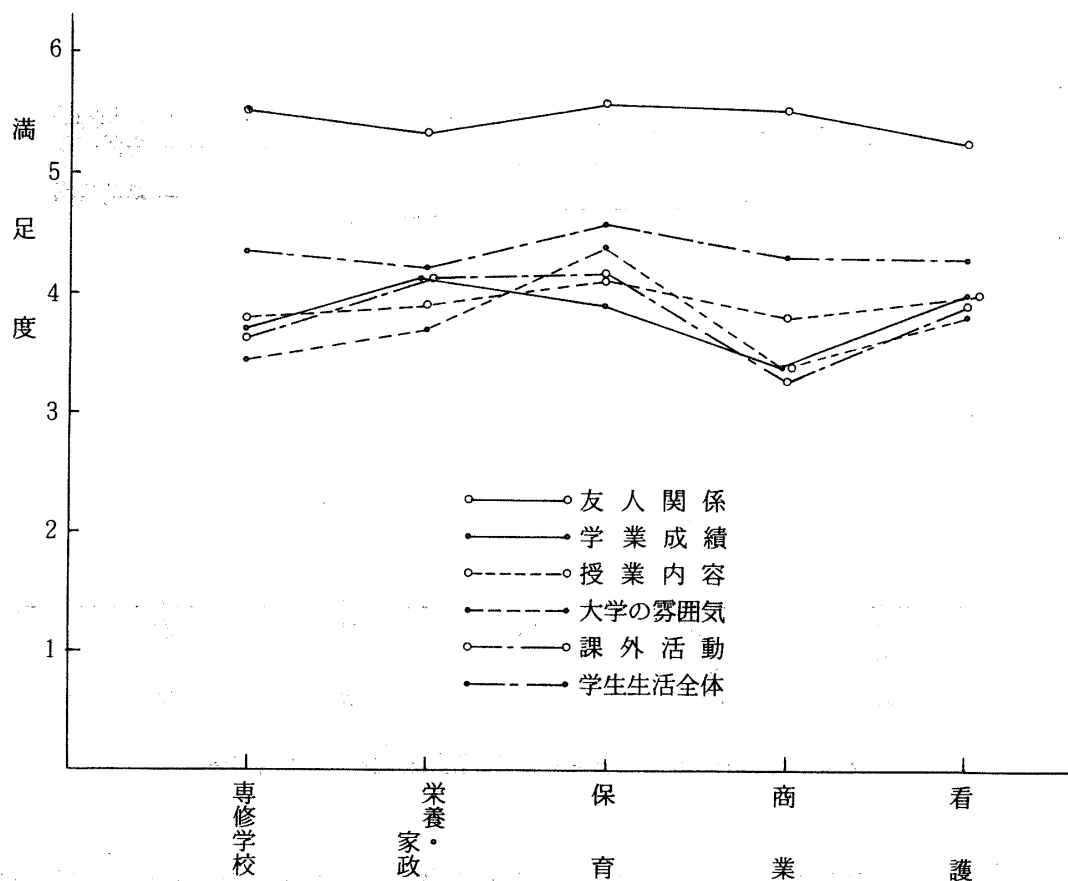


図6 専攻別にみた学生生活満足度の平均値

ように、分散分析の結果は、すべての下位尺度において統計的に有意な結果となった。そこで、それぞれの平均値をグループ間で比較してみると、学業成績の満足度は、栄養・家政系、看護系、保育系で、商業系よりも高い結果となった。一方、大学の雰囲気についての満足度は、

保育系で最も高く、他の4つのグループに比べ有意な差を示した。また、看護系が商業系よりも有意に高いことも見出された。つぎに、課外活動の満足度では、保育系、栄養・家政系、看護系が商業系よりも高くなっている。以上のように学業成績、大学の雰囲気、課外活動

の3つに関し満足度は、相対的に保育系で高く、商業系で低いことが示された。なお、友人関係、授業内容、学生生活全体の3つの下位尺度については、グループ間で有意な差はみられなかった。

図6から明らかなように、6つの下位尺度のなかでは、いずれの専攻においても友人関係の満足度が最も高い。

2. 数量化理論第Ⅲ類による職業興味と職業志向性尺度のパターン分類

(1) 職業興味と職業志向のパターン分類

青年後期における職業意識の中心要素である職業興味と職業志向性要因が、林の数量化理論第Ⅲ類に投入され、パターン分類がほどこされた。投入された要因とカテゴリはつぎのとおりである。職業興味の8つの下位尺度、すなわち事務的専門職、服飾・商業美術職、販売・現業職、医療・社会福祉職、マスコミ職、窓口サービス職、教育職、語学専門職（それぞれ、平均値を基準に高・低の2カテゴリに分割）、および職業志向性の3尺度、すなわち職務挑戦志向、人間関係志向、労働条件志向（それぞれ、平均値を基準に高・低の2カテゴリに分割）の11変数22カテゴリである。

パターン分類の結果、第Ⅲ次元までが有力な次元と考えられた（第Ⅰ次元－固有値 .21, $\rho = .46$ ；第Ⅱ次元－固有値 .14, $\rho = .37$ ；第Ⅲ次元－固有値 .12, $\rho = .34$ ）。結果は表24に示したとおりである。表の結果から明らかなように、第Ⅰ次元としては、「実務的職業に対する高い興味↔低い興味」と特徴づけられる次元が見出された。この次元では、プラスの方向に対して、販売・現業職、服飾・商業美術職、事務的専門職、マスコミ職、窓口サービス職などでのウエイトが高い。したがってプラスの方向は、実務的職業に対する高い興味の次元と考えられた。一方、マイナスの方向に対しては、やはり服飾・商業美術職、事務的専門職、販売・現業職、マスコミ職、医療・社会福祉職でのウエイトが高い。したがってマイナス方向は、実務的職業に対する低い興味の次元と考えられた。いずれにしても、第Ⅰ次元に対し高いウエイトを与えているのは職業興味の下の位尺度だけであり、職業志向性はこの次元に対しては何ら重要な関連を示していなかった。

第Ⅱ次元としては、「専門的職業をめざす挑戦意欲の低さ↔高さ」と特徴づけられる次元が見出された。この次元では、プラスの方向に対して、職業志向性の低群が高いウエイトを与えていた。したがってプラス方向は低い職業志向性の次元と考えられた。一方、マイナスの方向に対しては職業志向性の高群が高いウエイトを与えている。したがってマイナス方向は高い職業志向性の次

元と考えられた。

第Ⅲ次元としては、「対人的職業興味の低さ↔高さ」と特徴づけられる次元が見出された。この次元では、プラスの方向に対して、教育職や医療・社会福祉職に対する興味の低さと、窓口サービス職や語学専門職に対する興味の低さと、および労働条件志向性の高さ、逆に職務挑戦志向性の低さが高いウエイトを与えている。したがってプラス方向は職業を通じて自己実現をはかる意識が低い窓口サービスの職業への志向性の次元と考えられた。それに対して、マイナスの方向に対しては、教育職や医療・社会福祉職に対する興味の低さと、窓口サービス職や語学専門職に対する興味の低さと、および労働条件志向性への低さと、逆に職務挑戦志向性の高さが高いウエイトを与えている。したがって、プラス方向は対人的職業への志向性の次元と考えられた。以上の結果から第Ⅲの次元は窓口サービスの職業への志向性（低い対人的職業興味）と、高度の専門的知識と技術の要求される教育や医療に関わる職業への志向性（高い対人的職業興味）とを分ける軸であると考えられた。

(2) 専攻と職業意識の3次元との関係

数量化理論第Ⅲ類によって明らかにされた3つの職業意識の次元が、短大生の専攻とどのように関連しているかを検討してみよう。具体的には、3つの次元の上で、5つの専攻グループがどのような位置づけを与えられているのかを検討する。

図7は、表24に示した第Ⅰ次元と第Ⅱ次元の直交座標の上で、5つの専攻グループの位置関係を示したものである。図7において、専修学校系は、弱いながらも高い実務的職業興味（第Ⅰ次元）と高い挑戦意欲（第Ⅱ次元）をもっていることがわかる。これに対して商業系は、高い実務的職業興味をもちながら挑戦意欲は低い傾向にある。このようなちがいの背景には、専修学校系の学生の方が目的意識が明確で、卒業後の進路に対する姿勢がより自主的であるという両者の差が存在しているものと思われる。つぎに、栄養・家政系は、実務的職業興味も挑戦意欲もともに低い傾向にある。このグループは実務的な職業とは関わりの薄い学科で学び、大学で学んだことを卒業後現実の社会で生かす機会にも恵まれていないことを実際に感じているグループである。さいごに保育系と看護系に目を転じてみよう。この2つの系は、同じ第3象限にはいており、実務的な職業興味は低い、挑戦意欲は高い傾向にある。両系とも、教育的・対人関係の関心の強いグループであるので、実務的志向の低さは十分うなづける。

以上のように、図7においては、表24で明らかにされた「実務的職業に対する高い興味↔低い興味」と「専

図24 数量化理論第Ⅲ類に基づく職業興味と職業志向のパターン分類

変数名	第Ⅰ次元：実務的職業に対する高い興味 (プラス方向 - マイナス方向) ($\rho = .46$)		第Ⅱ次元：専門的職業をめざす挑戦意欲の低さ (プラス方向 - マイナス方向) ($\rho = .37$)		第Ⅲ次元：対人的職業に対する低い興味 (プラス方向 - マイナス方向) ($\rho = .34$)	
	カテゴリーNoと名称 (度数)	カテゴリーウエイト	カテゴリーNoと名称 (度数)	カテゴリーウエイト	カテゴリーNoと名称 (度数)	カテゴリーウエイト
ブラ	職業興味 (3) 2.販売・商業美術職	1.70	職業志向 (2) 1.人間関係	2.02	職業興味 (7) 1.教育	2.15
	職業興味 (2) 2.服飾・商業美術職	1.59	職業志向 (1) 1.職務挑戦	1.75	職業興味 (4) 1.医療・社会福祉職	1.66
	職業興味 (1) 2.事務的専門職	1.45	職業志向 (3) 1.労働条件	1.30	職業興味 (6) 2.窓口サービス職	1.43
	職業興味 (5) 2.マスコミ職	1.20	職業興味 (3) 2.販売・商業美術職	0.59	職業志向 (3) 2.労働条件	1.20
	職業興味 (6) 2.窓口サービス職	1.17	職業興味 (2) 2.服飾・商業美術職	0.46	職業興味 (8) 2.語学専門職	1.03
	職業興味 (4) 2.医療・社会福祉職	0.94	職業興味 (7) 1.教育	0.41	職業興味 (5) 2.マスコミ職	0.31
	職業興味 (8) 2.語学専門職	0.76	職業興味 (5) 1.マスコミ職	0.38	職業志向 (1) 1.職務挑戦	0.25
	職業興味 (7) 2.教育	0.42	職業興味 (1) 1.事務的専門職	0.24	職業興味 (2) 1.服飾・商業美術職	0.10
	職業志向 (3) 2.労働条件	0.13	職業興味 (4) 1.医療・社会福祉職	0.19	職業興味 (3) 1.販売・商業美術職	0.08
	職業志向 (2) 2.人間関係	0.08	職業興味 (6) 2.窓口サービス職	0.05	職業興味 (1) 2.事務的専門職	0.05
マイ	職業志向 (1) 2.職務挑戦	0.03	職業興味 (8) 2.語学専門職	0.02	職業志向 (2) 1.人間関係	0.04
	職業興味 (2) 1.服飾・商業美術職	-1.51	職業志向 (1) 2.職務挑戦	-2.23	職業興味 (7) 2.教育	-1.93
	職業興味 (1) 1.事務的専門職	-1.38	職業志向 (2) 2.人間関係	-2.21	職業興味 (4) 2.医療・社会福祉職	-1.51
	職業興味 (3) 1.販売・商業美術職	-1.32	職業志向 (3) 2.労働条件	-1.35	職業興味 (6) 1.窓口サービス職	-1.21
	職業興味 (5) 1.マスコミ職	-1.21	職業興味 (3) 1.販売・商業美術職	-0.46	職業志向 (3) 1.労働条件	-1.16
	職業興味 (4) 1.医療・社会福祉職	-1.03	職業興味 (2) 1.服飾・商業美術職	-0.43	職業興味 (8) 1.語学専門職	-0.98
	職業興味 (6) 1.窓口サービス職	-0.99	職業興味 (5) 2.マスコミ職	-0.38	職業志向 (1) 2.職務挑戦	-0.32
	職業興味 (8) 1.語学専門職	-0.73	職業興味 (7) 2.教育	-0.37	職業興味 (5) 1.マスコミ職	-0.31
	職業興味 (7) 1.教育	-0.46	職業興味 (1) 2.事務的専門職	-0.25	職業興味 (2) 2.服飾・商業美術職	-0.11
	職業志向 (3) 1.労働条件	-0.13	職業興味 (4) 2.医療・社会福祉職	-0.17	職業興味 (3) 2.販売・商業美術職	-0.10
ナ	職業志向 (2) 1.人間関係	-0.07	職業興味 (6) 1.窓口サービス職	-0.04	職業興味 (1) 1.事務的専門職	-0.04
	職業志向 (1) 1.職務挑戦	-0.02	職業興味 (8) 1.語学専門職	-0.02	職業志向 (2) 2.人間関係	-0.04

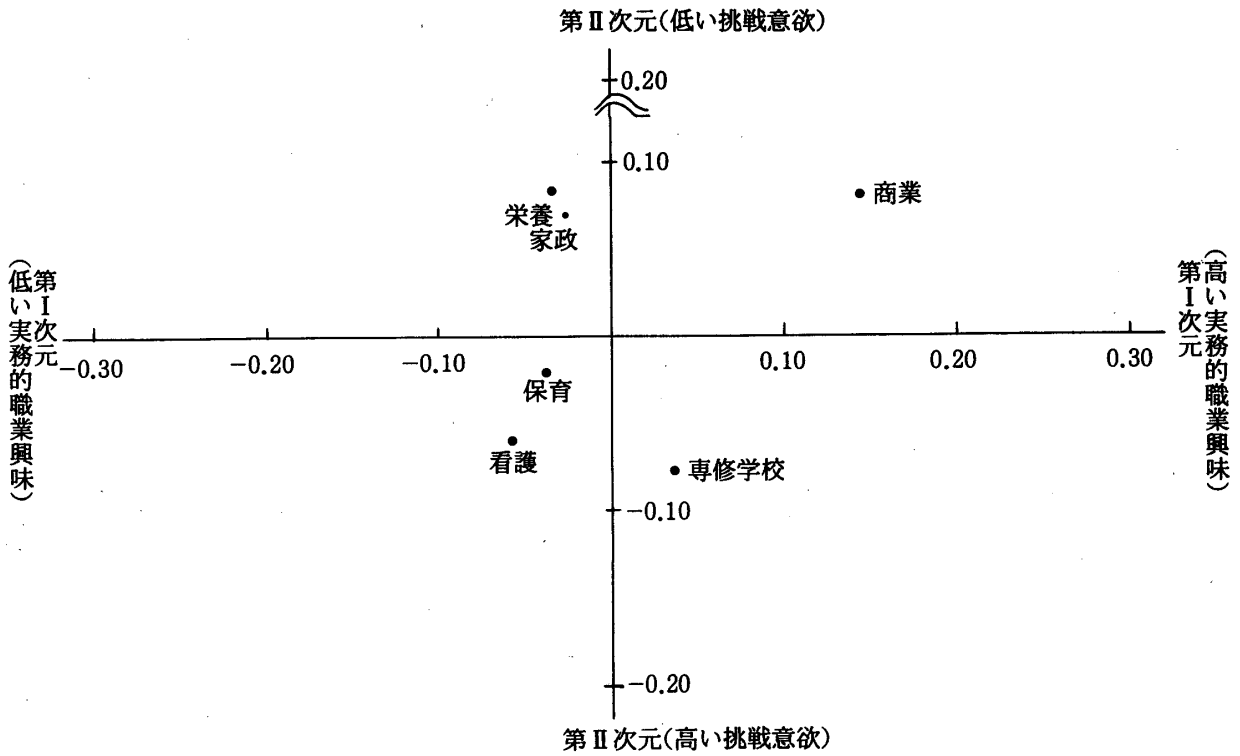


図7 数量化理論第Ⅲ類に基づく第I次元と第II次元の組み合わせからみた専攻5群の位置関係

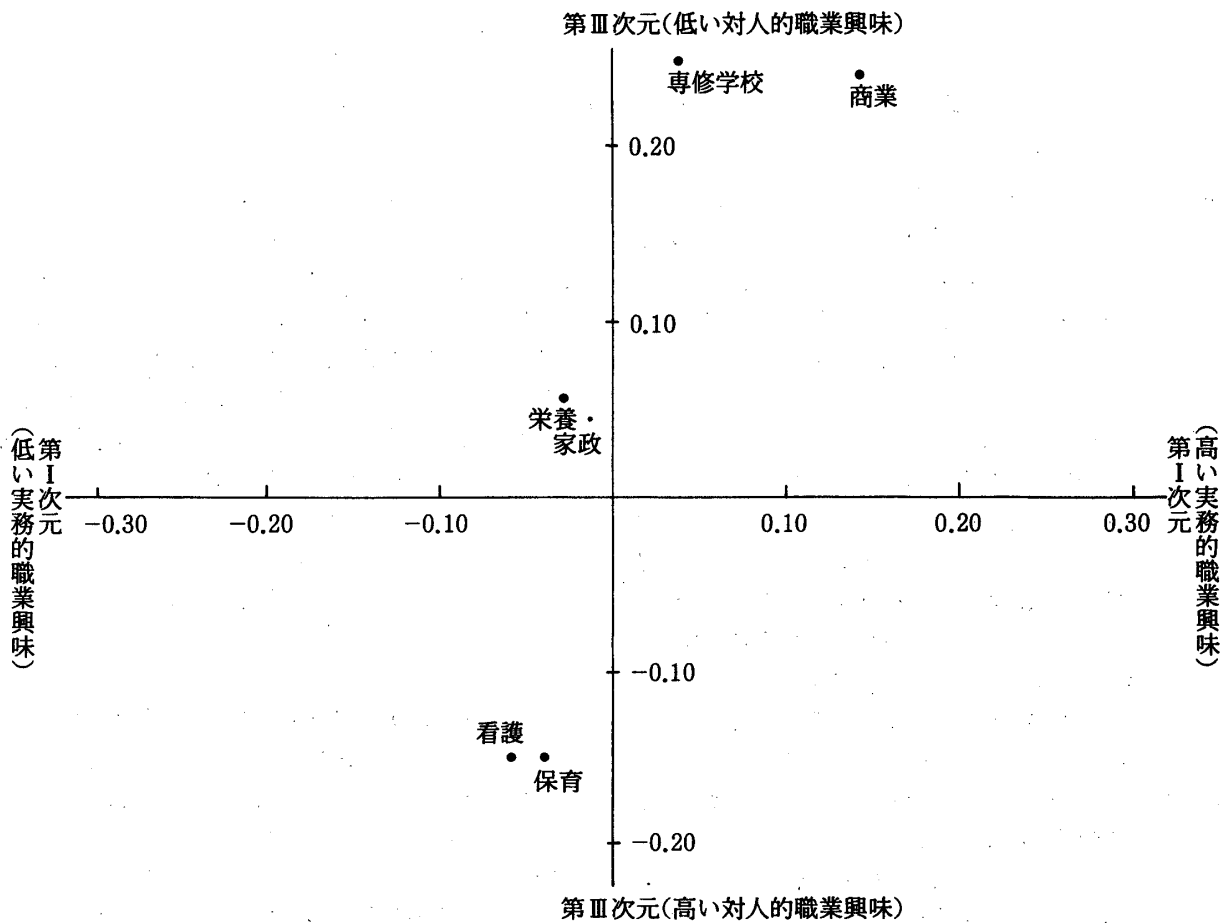


図8 数量化理論第Ⅲ類に基づく第I次元と第III次元の組み合わせからみた専攻5群の位置関係

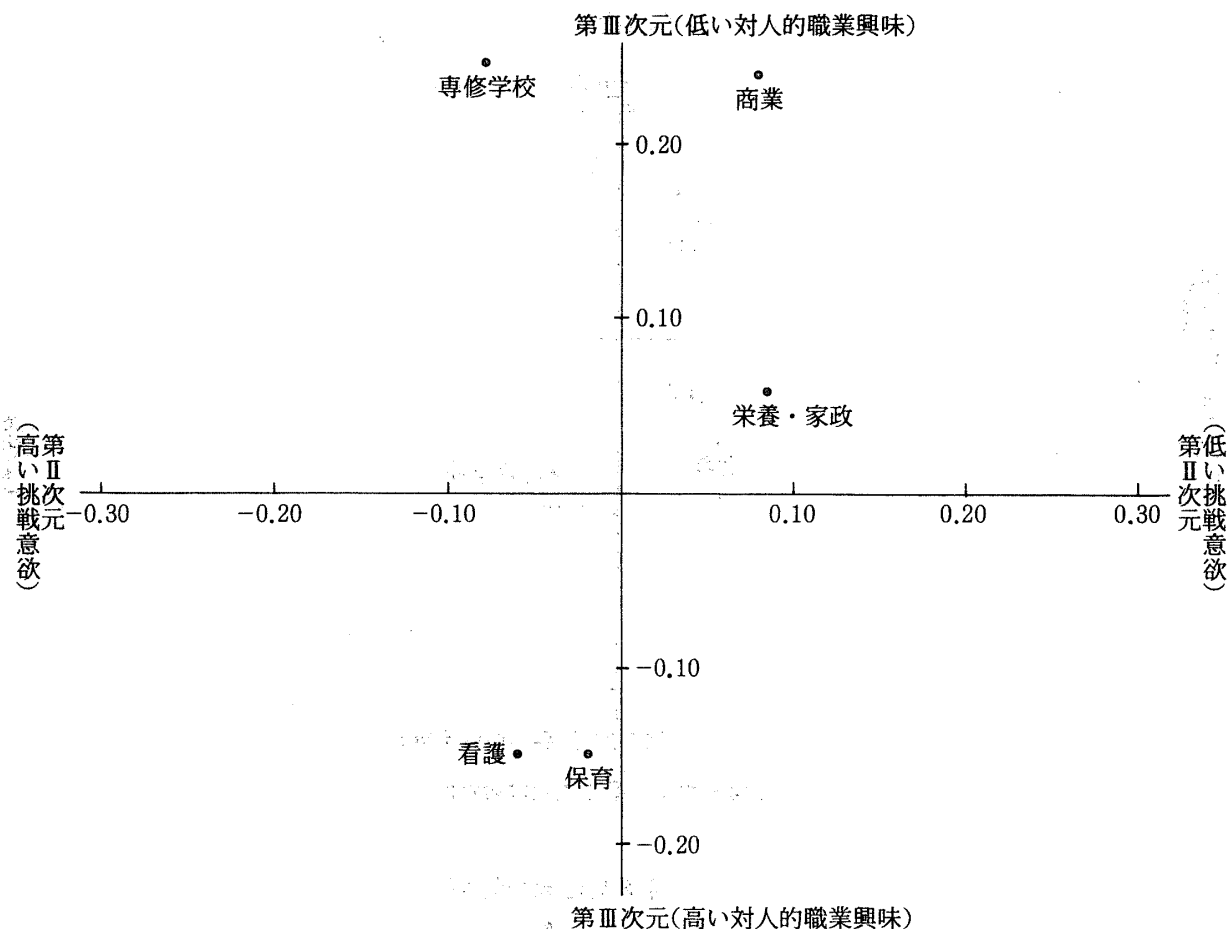


図9 数量化理論第III類に基づく第II次元と第III次元の組み合わせからみた専攻5群の位置関係

門的職業をめざす挑戦意欲の低さ↔高さ」という2つの次元によって、5つの専攻グループがそれぞれに特徴ある4つのグループに分離されることが示された。しかもこれらの4つのグループは、直交座標の上で第1象限から第4象限に相互対照的に散らばっていることが示された。

図8は第I次元と第III次元の直交座標の上で、5つの専攻グループを位置づけたものである。図によれば、第III次元は、保育系・看護系と専修学校系・商業系とを分けている軸であることがわかる。すなわち保育系・看護系ではもっぱら対人的職業への興味が高いことがうかがわれる。それに対して、専修学校系・商業系では対人的職業への興味は低く、弱いながらも実務的職業への興味をもっていることがわかる。なお、栄養・家政系はこれら2つの職業に対して、どちらかといえば中立的である。図8から明らかなように、5つの専攻グループは、大きく3つの群に分けられている。

図9は、第II次元と第III次元の組み合わせにもとづいて、5つの専攻グループを位置づけたものである。ここでも図7と同様、4つのグループ化が出現しているが、

それらのちがいは一層明瞭なものとなっている。まず、専修学校系は、高い挑戦意欲をもちながらも対人的興味は低い。一方、商業系は、挑戦意欲も低く対人的職業興味も低い点で、専修学校系と第II次元に関して対照的である。栄養・家政系は、第II次元に関しても第III次元に関してもその位置づけは明確ではない。これら3つのグループに対して、保育系と看護系は、弱いながらも挑戦意欲が高く、対人的職業興味も高いという点で特徴的な位置づけが与えられている。このように、図9に示された5つの専攻グループの位置関係は、他の次元の組み合わせと比べ、グループ間の特徴をより鮮明に描き出していると思われる。

4. 職業興味の規定要因：性役割社会化経験、自己概念、職業志向との関連について

(1) 青年中期までの性役割社会化経験と職業興味との相関関係

表25には、女子短大生における性役割社会化経験と職業興味との相関関係が示されている。性役割社会化経験はすでにみたように、子供の頃に期待されていた人間像、

表25 青年中期までの性役割社会化経験と青年後期における職業興味との相関関係 (N=680)

性役割社会化 に関する 下位尺度	青年中期までの諸経験についての尺度								
	人 間 像		性役割社会化経験		学 校 生 活 経 験				
	M 得 点	F 得 点	男性役割	女性役割	文化と 教 養	クラスの 人 気 者	リーダ ーシ ップ	流行追随	学業優秀
事務的専門職	-.02	.10**	.08*	.15***	.27***	-.03	.06	.28***	-.03
服飾・商業美術職	.09*	-.00	.08*	.05	.22***	-.08*	.09*	-.06	.08*
販売・現業職	.03	.04	.07	.08	.13***	-.10**	.05	.08*	-.03
医療・社会福祉職	.09*	.00	.12***	-.00	.22***	-.09*	.10**	-.07	.04
マスコミ職	.07	.01	.15***	.14***	.33***	.13***	.11**	.21***	-.02
窓口サービス職	.05	.18***	.06	.20***	-.08*	.15***	.08*	.30***	-.08*
教育職	.07	.01	.14***	.06	.02	.07	.15***	-.11**	.06
語学専門職	.05	.02	-.01	.09*	.13***	.01	.04	.14***	.08*

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

子どもの頃の性役割しつけ、中学・高校での学校生活経験の3つの側面からとらえられている。

表25の結果にしたがって、まず子どもの頃に期待された人間像と職業興味との関連をみてみよう。M得点は、職業興味のうち服飾・商業美術職および医療・社会福祉職との間に弱い正の相関がみられた (p<.05)。一方、F得点は事務的専門職、窓口サービス職との間に正の相関がみられた (p<.01, p<.001)。しかし、一貫した職業興味との有意な関係は得られてはいない。

子どもの頃の性役割しつけについてみると、男性役割経験は、事務的専門職、服飾・商業美術職、医療・社会福祉職、マスコミ職、そして教育職という5つの職業興味タイプとの間に有意な正の相関を示している。とくに、マスコミ職、教育職、医療・社会福祉職との間の相関が高いことがわかる。一方、女性役割経験は、事務的専門職、販売・現業職、マスコミ職、窓口サービス職、語学専門職という5つの職業興味タイプとの間に有意な正の相関を示している。とくに、窓口サービス職、事務的専門職、マスコミ職との相関が高い。以上の結果をまとめてみると、子どもの頃のしつけでの、男性役割経験は教育職および医療・社会福祉職(人間関係中心)と、女性役割経験は窓口サービス職および語学専門職(実務中心)と有意な正の相関を示していること、さらに、事務的専門職とマスコミ職はいずれのしつけ経験とも有意な正の相関を示していることがわかる。

つぎに中学・高校での学校生活経験と職業興味との相関をみてみよう。「文化と教養」経験は表25から明らかのように、教育職を除くすべての職業興味と有意な正の相関を示している。そしてとくにマスコミ職 (r = .33)

と事務的専門職 (r = .27) との相関が高い。なお、窓口サービス職との間には有意な負の相関が得られた。

「クラスの人気者」経験は、服飾・商業美術職、販売・現業職、医療・社会福祉職とは有意な負の相関、逆にマスコミ職、窓口サービス職とは有意な正の相関を示していた。前者の職業群は地味な性格を持ち、後者の2職業はいずれも派手で目だつ仕事であることを考えると、「クラスの人気者」経験との上記のような関連は十分うなづけよう。「リーダーシップ」経験は、全体としては弱いながらもすべての職業興味と一貫した正の相関を示しており、事務的専門職、販売・現業職、語学専門職を除く5つの職業興味タイプとの間に有意な相関が得られた。「流行追随」経験は、事務的専門職、販売・現業職、マスコミ職、窓口サービス職、語学専門職との間には有意な正の相関を示している。とくに、窓口サービス職、事務的専門職、マスコミ職との相関が高い。これに対して、教育職との間には有意な負の相関が見出された。このような対照的な相関関係は、上述のような職業のもつ派手さ、かっこ良さの要因に起因するものと考えられる。

さいごに「学業成績優秀」経験は、服飾・商業美術職および語学専門職との間に有意な正の相関を、窓口サービス職との間に有意な負の相関を得ているが、全体として相関関係は弱く明確な関連を見出すのは困難である。単に学業成績が良いということだけでは、特定の職業を選択する条件としては、きわめて脆弱ということであろう。

以上の結果をまとめてみると、青年中期までの性役割社会化経験と職業興味との相関関係は、職業興味タイプによってかなり異なるパターンを示していることがわか

る。しかしそのパターンにはある程度の一貫性が見出された。とくに学校生活経験では、文化と教養およびリーダーシップ経験、とりわけ前者は、ほぼすべての職業興味と正の相関を示した。この2つは職業選択のための基礎的経験といえる。とくに、マスコミ職、医療・社会福祉職に対し、これらの経験が強く関わっている。つぎに、クラスの人気者、流行追随の派手さに関わる学校生活経験は、マスコミ、窓口業務などのやはり派手さのある職業と正の相関をもち、その他の地味な職業の興味とは負の相関をもつ結果となった。また、性役割しつけでは、男性役割経験が一貫してほとんどの職業興味と正の相関を示した。この点は、男性性と職業志向との結びつきを示す従来の知見(若林他, 1984, 1985)と一致している。

(2) 青年後期の自己概念および職業志向と職業興味との相関関係

表26には、女子短大生における自己像および職業志向と職業興味との相関が示してある。自己像のM得点は、8つの職業興味タイプのうち販売・現業職、医療・社会福祉職、教育職の3つのタイプを除く、5つの職業興味タイプとの間に有意な正の相関を得ている。とくに、マスコミ職との相関が高い。一方、F得点は、8つの職業興味タイプのうち事務的専門職、マスコミ職、窓口サービス職との間でのみ有意な正の相関が得られたにすぎない。

つぎに、職業志向の3つの下位尺度と職業興味タイプとの相関をみることにする。表26に示したように、職務挑戦志向性は、事務的専門職、医療・社会福祉職、マスコミ職との間には有意な正の相関を、窓口サービス職と

の間には有意な負の相関を得ている。一方、人間関係志向性は、医療・社会福祉職および教育職との間に有意な正の相関を得たにすぎない。また労働条件志向性は事務的専門職、マスコミ職、窓口サービス職、語学専門職という4つの職業興味タイプとの間には有意な正の相関が、また教育職との間には有意な負の相関を示している。

以上の結果をまとめてみると、服飾・商業美術職および販売・現業職は現時点での自己概念や職業志向性と明確な関連性をもっていないが、残る6つの職業興味タイプ、とくに事務的専門職やマスコミ職、窓口サービス職は、それぞれ自己概念や職業志向性とユニークな結びつきをもっていることがわかる。これらの諸変数の関連についてはさらに検討が必要になると思われる。

(3) 重回帰分析による職業興味の規定因の検討

青年中期までの性役割社会化経験と青年後期の自己概念や職業志向性が、女子短大生の職業興味とどのような関連性をもっているかをさらに検討するため、重回帰分析による検討が行われた。分析に投入された独立変数群は、中学・高校における学校生活経験(5変数)、父母の性別しつけ(2変数)、子どもの頃に期待された人間像(2変数)、子どもの頃の性役割しつけ(2変数)、M得点、F得点、職業志向性(3変数)の16変数である。また従属変数は、職業興味の下位尺度である。したがって、全体で8組の重回帰分析が行われたことになる。

重回帰分析の方法としては、ステップ・ワイズ法が用いられた。

表27には、8組の重回帰分析で得られた標準化偏回帰係数と重相関係数(R)、決定係数(R²)、F値を示し

表26 青年後期における職業・自己像と職業興味との相関関係 (N=680)

職業・自己像に関する下位尺度	現在の職業・自己像についての尺度				
	現在の自己像		職業志向		
	M得点	F得点	職務挑戦	人間関係	労働条件
事務的専門職	.10*	.15***	.15***	.06	.08*
服飾・商業美術職	.09*	.00	.00	-.03	.02
販売・現業職	.03	.06	-.02	-.05	-.03
医療・社会福祉職	.06	.05	.14***	.09*	.01
マスコミ職	.25***	.08*	.19***	.04	.08*
窓口サービス職	.11**	.25***	-.11**	.03	.16***
教育職	-.02	.02	.04	.19***	-.10*
語学専門職	.08*	.02	.05	.02	.13***

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

表27 重回帰分析の結果

	中学・高校における学校生活経験							父の性別 別しつけ	母の性別 別しつけ	期待された人間像		性別役割経験			
	文化と 教養	クラスの 人気者	リーダー シップ	流行追随	学業成績 優秀	M得点	F得点			男性役割	女性役割	M得点	F得点	男性役割	女性役割
事務的専門職	.26***	-.10***	.06*	.27***	-.08***	.02	-.08***	-.10***	.06*	-.06**	-.06**	-.06**	-.06**		
服飾・商業美術職	.20***	-.11***	.11***	-.08***	.03	.07**	-.07***	.06*	-.05	.01	.06*	.06*	.06*		
販売・現業職	.12***	-.18***	.10***	.10***	-.04	—	-.08***	-.02	.01	.05	.07*	.07*	.07*		
医療・社会福祉職	.17***	-.11***	.13***	-.09***	-.04	-.06	-.09***	.03	—	.08***	-.02	-.02	-.02		
マスコミ職	.32***	.08***	.03	.15***	-.10***	.08***	-.09***	.01	-.07***	-.01	.08***	.08***	.08***		
窓口サービス職	-.03	.01	.03	.21***	-.06*	.05	-.04	—	.05	.03	.05	.05	.05		
教育職	—	.03	.13***	-.14***	.01	-.04	-.11***	-.02	.04	.11***	.06	.06	.06		
語学専門職	.12***	-.04	.01	.12***	.06*	.03	-.12***	.04	-.04	-.09***	.11***	.11***	.11***		

(注) 表中一印は、その変数が最終ステップまでに回帰式に投入されなかったことを表わす。

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

	職業志向性			自己イメージ		R	R ²	F	df
	職務挑戦	人間関係	労働条件	M得点	F得点				
事務的専門職	.05	.01	—	-.02	.04	.43	.19	10.92***	14/ 665
服飾・商業美術職	-.11***	-.05	.07**	.09***	.01	.31	.10	4.36***	16/ 663
販売・現業職	-.09***	-.03	-.04	.02	.05	.26	.07	3.20***	15/ 664
医療・社会福祉職	.03	.04	.01	-.03	.10***	.32	.11	5.21***	15/ 664
マスコミ職	.04	-.04	.06**	.11***	-.04	.45	.20	10.55***	16/ 663
窓口サービス職	-.19***	.03	.08***	.06	.11***	.41	.17	8.87***	15/ 664
教育職	-.06	.25***	-.18***	-.08***	.07**	.36	.13	6.76***	15/ 664
語学専門職	-.02	-.05	.13***	.07*	-.06	.28	.08	3.60***	16/ 663

端

た。表から明らかなように、F値はいずれの場合も統計的に有意であった。つぎに表27の結果にしたがって、職業興味の8つの下位尺度のそれぞれについて、どの独立変数で偏回帰係数が大きな貢献をしているかを検討する。

事務的専門職では、統計的に有意な偏回帰係数は16変数のうち9変数であった。語から明らかなように、最も大きい係数は流行追随と文化と教養経験において得られている。逆に、クラスの人気者と学業成績優秀経験、母親の性別しつけ、期待された人間像(M特性)は有意な負の貢献をしている。

服飾・商業美術職では、11変数で偏回帰係数が有意であった。正の最も大きい係数は文化と教養経験でリーダーシップ経験、自己イメージ(M得点)がこれに続いている。なお、クラスの人気者、流行追随、母親の性別しつけ、職務挑戦志向性などは、有意なマイナスの値を示している。

販売・現業職では、7変数で偏回帰係数が有意であった。正の大きい係数は文化と教養、リーダーシップ、流行追随経験において、また負の係数はクラスの人気者、母親の性別しつけ、職務挑戦志向性において見出されている。

医療・社会福祉職では、7変数で偏回帰係数が有意であった。正の大きい係数は、文化と教養、リーダーシップ経験、自己イメージ(F得点)などで、また負の係数はクラスの人気者、流行追随、母親の性別しつけなどで見出されている。

マスコミ職では、10変数で偏回帰係数が有意であった。そのうち、正の大きい係数は、文化と教養、流行追随経験と自己イメージ(M得点)で、逆に学業成績優秀、母親の性別しつけなどは負の方向を示している。

窓口サービス職では、5変数で偏回帰係数が有意であった。このうち流行追随経験、労働条件志向性、自己イメージ(F得点)が高い正の係数を示し、逆に、職務挑戦志向性では高いマイナスの値が得られている。これらの結果から、窓口サービス職は派手で女性的な経験や自己概念との結びつきが強く、職務挑戦志向性や学業成績優秀経験とは逆の関係にあることがわかる。

教育職では、8変数で偏回帰係数が有意であった。このうち人間関係志向性、リーダーシップ、男性役割経験では高い正の値が、労働条件志向性、流行追随、母親の性別しつけでは高い負の値が見出されている。つまり、人間関係を志向しリーダーシップや力強さもそなえており、逆に労働条件を志向せず、女らしい派手さの経験をもたないことが教育職に対する興味と関連があるといえる。こうしたことから、青年中期までの男性的な経験と青年後期における人間関係志向性が教育職に対する興味

と結びついていると思われる。

さいごの語学専門職でも、8変数で偏回帰係数が有意であった。正の方向では文化と教養、流行追随、労働条件志向、女性役割経験が、負の方向では母親の性別しつけ、男性役割経験が高いウェイトを与えていた。

以上の結果から、①どの職業興味に対しても中学・高校における学校生活経験が重要な関わりをもっていること、とくに、一般的にみて、文化と教養、リーダーシップ経験は正の、クラスの人気者と学業成績優秀はどちらかといえば負の貢献を示している。また、流行追随は地味な教育職や医療・社会福祉職では負、その他の派手さのある職業では正のウェイトを示している。②母親の性別しつけ、すなわち母親から女らしさを意識して育てられたという認知は、すべての職業興味に対し、負の影響を与える方向で作用している。これに対し、父親の同様なしつけは一貫した効果を示していない。③子どもの頃期待された人間像の認知は、M-F特性でみる限り職業興味に対しては、強い規定要因とはなっていない。④性役割経験はあまり強い規定力を示していないが、どちらかといえば男性役割経験ではなく、女性役割経験の方が、一貫した正の効果を与えている。⑤従来の研究結果に反し、職務挑戦志向性は、職業興味に対しては、どちらかといえば負の影響を与えている。これに対し労働条件志向性は正(ただし教育職を除く)の効果をもつ。興味深いのは教育職に対する興味で、高い人間関係志向性と低い労働条件志向性によって特徴づけられている。⑥つぎに、自己イメージであるが、結果はあまり一貫したものとなっていない。今までの研究では、M得点と職業意識との強い結びつきが見出されたが、表27の結果は必ずしもそれを支持していない。⑦さいごに R^2 の値をみると、7%から20%と回帰方程式による説明力は有意とはいえ必ずしも高くはない。今後、職業興味に対し、より説明力のある変数を見出していくことが必要であろう。

V. 結論と考察

本研究では、職業興味と進路選択過程の構造を明らかにするために、職業社会化過程を外的に規定する要因、青年中期までの性役割社会化経験に関わる諸尺度、青年後期の職業意識と自己概念に関わる諸尺度について質問紙調査が行われた。そして、3つの観点から分析が行われた。

第1に、外的規定要因や青年中期までの性役割社会化経験の質的差異が女子短大生の所属する専攻とどのように関連しているかが検討された。その結果、つぎのような結果が得られた。①父の学歴は、専修学校系、商業系で相対的に高く、看護系で低い。②父の職業をみると、

専修学校系では相対的に会社員が多く、看護系では公務員・専門的職業が多い。残る3つの系では相対的に自営業が多い。⑨家庭の社会経済的水準については、商業系が相対的に高く感じており、専修学校系、栄養・家政系、看護系では相対的に低く感じている。④保育系および商業系の学生が両親との同一視や生き方を参考にする度合いが強く、また親から女性役割づけを受けてきた程度が強いと認知している。この点は若林他(1985)の研究結果と一致している。⑤中学・高校での学校生活経験は、専攻によって異なっている。たとえば、商業系は知的な活動・関心は低い但对人関係は良好で流行に敏感である。一方、栄養・家政系と看護系はこれと逆に、知的活動は高く対人関係や流行に関しては地味である。

数量化理論Ⅲ類によって得られた2つの次元(「MF型しつけ-mf型しつけ」と「M型しつけ-F型しつけ」)にもとづいて各専攻の位置関係を図示した結果をみると、商業系が他の4つの系とは異なり、第1次元についてMF方向、第2次元についてF方向に位置していた。この結果は、商業系では両親への同一視が強いことと、女の子を意識したしつけがなされていることを示している。しかもさきの商業系では社会経済的水準が上位という結果と考え合わせると、この商業系は若林他(1985)によって指摘された「上位-同一視群」に対応すると考えられる。

第2の課題は、青年後期における職業興味、職業志向、自己概念の質的差異が専攻とどのように関連しているかを検討することであった。職業志向性の下位尺度について、専攻間で比較した結果によると、職務挑戦志向性尺度では、専修学校系および看護系の平均値が商業系の平均値よりも高いことが示された。また数量化理論Ⅲ類の結果からは、3つの次元の組合せによって、5つの専攻の関係がかなり明確に示された。すなわち、専修学校系は実務的職業興味と挑戦意欲は高い但对人的職業興味は低い。商業系は、高い実務的職業興味をもちながらも挑戦意欲と対人的職業興味は低くなっている。栄養・家政系は、実務的職業興味も挑戦意欲も低く、また対人的職業興味についてもはっきりしていない。一方、保育系と看護系は、実務的職業興味は低いが、挑戦意欲は高く、さらに対人的職業興味も高いという点で他の専攻とは異なる特徴を示している。

これまでのわれわれの研究(若林他, 1983, 1984, 1985)では、職業意識や自己概念について人文系、保育系、看護系の3つの専攻間で比較してきた。そして人文系は職業専門教育と最も結びつかない系であり、保育や看護系は職業専門教育に徹した系であると考えられた。本研究で得られた知見によれば、今までの専門-非専門という

カテゴリーでは十分解明できない職業意識の内容が、職業興味との関連で明らかにされたと思われる。人文系に含まれ専修学校系や商業系の学生も、実務的職業に対する興味が強いという点では1つの特徴を示していた。しかし、この2つの系は挑戦意欲という点で異なっているのである。一方、保育系と看護系は対人的職業興味は高いが実務的職業興味は低いというように、職業興味に関する限り人文系と対照的である。

本研究で得られた5つの専攻は、短大生が所属する学科の一部にすぎないので、今後はさらに専攻による職業興味の違いを明確にするために、一層広範囲の専攻分野から資料を収集することが必要である。また、4年制大学生と短大生とでは、職業に対する考え方が異なるとともに就職可能な職業の選択範囲も広がってくるので、4年制大学生を対象とした調査も必要である。

第3の課題は、女子短大生の職業興味を規定する要因を明らかにするために、性別役割社会化経験と、職業志向、自己概念の諸変数の影響力を吟味することであった。この目的のために、相関分析および重回帰分析による検討を行ったところ、教育職を除くどの職業興味に対しても中学・高校における学校生活経験が重要な関わりをもっていること、母親から女らしさを意識して育てられたという認知は全ての職業興味に対して負の影響を与える方向で作用すること、職務挑戦志向性は職業興味に対してどちらかといえば負の影響を与えているが、労働条件志向性は正の効果を持っていることなどが明らかにされた。さらに、これらの結果のうちとくに教育職に対する興味と、中・高時代における文化と教養経験との結びつきの弱さについては、さらに検討を要すると思われる。教育職に求められる豊かな経験が中学・高校生活における経験を基礎としているならば、教育職に興味を持つ者こそ文化と教養経験が要求されるであろう。この点で、教育職に対する興味と青年中期の学校生活経験との関係は、本研究では十分解明されたとはいえない。全体としてみると、重回帰分析の結果は、 R^2 値は小さく、回帰方程式による説明力は必ずしも高くない。したがって、今後は、職業興味に対してより説明力のある変数を見出していくことが必要である。例えば、職業興味の規定因として家庭の背景は重要な要因と考えられるので、そうしたカテゴリカルなデータを投入変数として扱うことも可能であろう。

以上の結果から、図1に示した職業興味と進路選択過程の構造は、本研究の分析を通じて、われわれが予想した通り検証されたといえる。しかし、本研究で得られたデータのうち青年中期までの性別役割社会化経験に関わるデータは、女子短大生による回想データであり、正確さ

という点では問題を含んでいる。今後この点については、中学生あるいは高校生に対して調査をし、青年後期までの縦断的データを得る必要があると思われる。また、職業選択の予測という観点からいえば、高校生の時点でのデータから将来の職業選択を予測できる資料の収集が必要になるだろう。そのためにも、さらに変数について吟味をし、職業選択過程の構造を明確にすることが求められる。

文 献

- 愛知県婦人労働サービスセンター 1983 婦人の管理・監督職に関する研究——キャリア形成に関する面接調査——
- 有馬真喜子(監) 1982 あなたを伸ばす職業 生かす資格 自由現代社
- Eberhardt, B.J., and Muchinsky, P.M. 1982 Biodata determinants of vocational typology: An integration of two paradigms. *Journal of Applied Psychology*, 67, 714-727.
- Eccles, J.S., and Hoffman, L.W. 1984 Sex roles, socialization, and occupational behavior. In H.W. Stevenson and A.E. Siegel (Eds.), *Child development research and social policy*. Vol. 1. pp.367-420. Chicago: University of Chicago Press.
- 後藤宗理 1985 青年期と職業選択 若林 満・伊藤雅子(編)女性は自立する 福村出版
- Holland, J.L.A. 1973 *Making vocational choices*. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall, Inc.
- 伊藤裕子 1980 女子青年の性役割観と父母の養育態度——職経歴選択を中心に——教育心理学研究, 28, 67-71
- 柏木恵子 1972 青年期における性役割の認知Ⅱ 教育心理学研究, 20, 48-59
- 柏木恵子・久野洋子・門馬公子・村山真理 1973 子供の性役割学習過程——母親の要因との関連で——東京女子大学論集, 23, 73-98
- 柏木恵子・古沢頼雄・鳥居登志子 1975 親の性別しつけと青年——青年の性役割観形成の一側面として——依田新(編)現代青年の生態 金子書房
- 三宅一郎・中野嘉弘・水野欽司・山本嘉一郎 1977 SPSS統計パッケージ:Ⅱ, 解析編 東洋経済新報社
- 小川一夫・田中宏二 1979 父親の職業が息子の職業選択に及ぼす影響に関する研究 教育心理学研究, 27, 272-281
- 小川一夫・田中宏二 1980 親の職業が娘の職業選択に及ぼす影響に関する研究 教育心理学研究, 28, 328-331
- Owens, W.A., and Schoenfeldt, L.F. 1979 Toward a classification of persons. *Journal of Applied Psychology*, 64, 569-607.
- Spence, J.T., and Helmreich, R. 1978 *Masculinity and femininity: Their psychological dimensions, correlates, and antecedents*. Austin: University of Texas Press.
- Spence, J.T., Helmreich, R., and Stapp, J. 1975 Ratings of self and peers on sex role attributes and their relation to self-esteem and conceptions of masculinity and femininity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 32, 29-39.
- 鹿内啓子・後藤宗理・若林 満 1982 女子大生の社会的・職業的役割意識の形成過程に関する研究——性役割タイプと自己能力評価を中心として——名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 29, 101-136
- 田中宏二・小川一夫 1981 親の期待と親への同一視が看護職の継承に及ぼす影響 教育心理学研究, 29, 166-170
- 若林 満・後藤宗理・鹿内啓子 1983 職業レディネスと職業選択の構造——保育系, 看護系, 人文系短大生における自己概念と職業意識との関連——名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 30, 63-98
- 若林 満・後藤宗理・鹿内啓子 1984 女子大生における職業選択過程の予測的研究(I)——職業決定群と未決定群の比較をもとに——名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 31, 123-161
- 若林 満・後藤宗理・鹿内啓子 1985 女子大生における職業選択過程の予測的研究(Ⅱ) 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 32, 287-310
- 若林 満・鹿内啓子・後藤宗理 1981 女性の社会的役割態度と職業自己イメージ——尺度の構成と比較分析——名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 28, 71-98
- 若林 満・鹿内啓子・後藤宗理 1982 キャリア発達と職業自己像——女性専門職の場合——名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 29, 137-155
- 若林 満・富安玲子・湯川隆子 1983 民間企業における女性管理・監督職のキャリア形成——面接法に基づく類型化と質問紙データのパターン分類結果との対

応関係について——名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），30、177-205

（1986年7月31日 受稿）

ABSTRACT

SEX-ROLE SOCIALIZATION AND VOCATIONAL INTERESTS AMONG THE FEMALE COLLEGE STUDENTS

Mitsuru WAKABAYASHI, Motomichi GOTO, Keiko SHIKANAI

The present study is aimed at exploring the structure of vocational interests and career choice processes among female college students. For this purpose, a set of instruments for measuring sex-role socialization and vocational interests were developed. Subjects consisted of 680 female junior college students majoring in five different fields in vocational specialization: business college (n=72), home science (n=112), kindergartener (n=189), commerce (n=127), and hospital nurse (n=180).

Subjects were asked to respond to the questionnaire which contained the following instruments. (1) Biographical data included information on the choice of college, parent educational levels, father's and mother's occupations, the socio-economic status of the family, and perceived parental lifestyle and sex-role attitudes. (2) The personality traits preferred by the parents during childhood contained 23 adjectives (7-point) in which masculinity and femininity (M-F) scales were imbedded. (3) The experiences of socialization given by the parents during childhood included 25 items relating to child-rearing practices of the parents (4-point scales). This instrument produced 2 orthogonal factors labelled as masculine and feminine socialization experiences respectively. In addition, parental control on sex-typing was rated by the subject by using a 5-point scale. (4) A measure of highschool experiences included 56 activities which the subjects went through during their school lives. Subjects were asked to rate each one by using a 5-point scale. This instrument produced 5 orthogonal factors that were labelled as (a) cultural and intellectual interest, (b) social extroversion and popularity seeking, (c) leadership in classes and sports, (d) fashion followers, (e) academic achievement. (5) A job orientation instrument consisted of 30 items which subjects might want to have as important goals or conditions for their future occupations. They were asked to rate each one by using a 5-point scale. This instrument produced 3 factors labelled as job challenge, human relations, and working conditions respectively. (6) The self-image included 23 adjectives each with a 7-point scale. This instrument produced masculinity and femininity (M-F) scales on self-image. (7) Vocational interests were measured by using 97 job titles in which female students might show some interest. They were asked to rate each one by using a 4-point scale. This instrument produced 8 orthogonal factors: (a) specialized clerical jobs, (b) dressmaking and industrial art design, (c) sales and production work, (d) medical and social welfare specialists, (e) mass media and journalism, (f) receptionist and customer service, (g) teacher, and (f) foreign language specialist.

The purpose of the analysis was (1) to compare differences in the contents of socialization experiences from childhood to the adolescence among female college students in different occupational lines (majoring fields), and then (2) to explore the influence of major fields on vocational interests and self-image in late adolescence. To answer these questions, statistical analyses were conducted based on ANOVA, a method of Hayashi's Quantification-III, and a multiple regression analysis. Major findings are as follows.

First, ANOVA based on the data on sex-role socialization and school experience produced the following results. (1) It was found that students in kindergartener and commerce fields tended to identify themselves more with their parents and also to have received more sex-typed treatments from their parents than those in other occupational lines. (2) Regarding the school experiences, the commerce students showed higher scores in both leadership and fashion followers scales, but they were lower in cultural and intellectual interests and academic achievement scales. On the other hand, those in home science and nursing areas were higher in cultural and intellectual interests and academic achievement scales, but lower in leadership and fashion followers scales.

The Hayashi's Quantification-III produced two dimensions related to the sex-role socialization; First, androgynous vs. undifferentiated sex-role training, and second masculinity vs. femininity sex-role training. Configurations of five subgroups on the above two dimensions showed that the commerce students tended to identify stronger with their parents than other subjects, and that were trained to follow traditional sex-role stereotypes. Second, vocational interests, job orientations, and self-concepts of the female students were compared across subgroups. The method of Hayashi's Quantification-III produced three dimensions: (a) high vs. low interest in practical vocations, (b) high vs. low job challenge for specialization, and (c) high vs. low interpersonal interest in vocations. The locations of the five subgroups on the above three dimensions indicated that (a) subjects from business college had higher interest in practical vocations and also in job challenge, but lower interest in interpersonal-oriented vocations, (b) those from the commerce major had higher interest in practical vocations, but lower in job challenge and interpersonal-oriented vocations, (c) those from the home science field showed neither unique vocational interest profile nor needs for job challenge, (d) those from nursing and kindergartener courses had lower interests in practical vocations, but showed higher job challenge needs and interests in interpersonal aspects of the vocations.

Finally, a multiple regression analysis conducted to examine the influence of sex-role socialization, job orientation, and self-concepts on vocational interests among female college students produced the following results. (1) The school experiences during early adolescence were most strongly related to the level of interest in all vocational categories, except for the teacher, and (2) traditional sex-role training by mothers tended to have negative effects on all vocational interests.